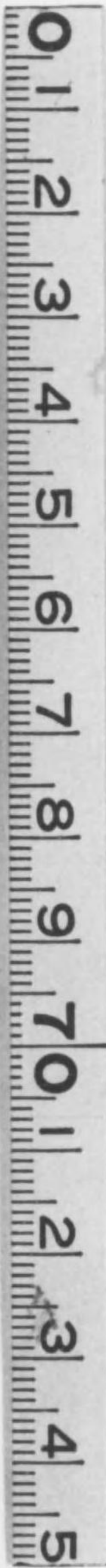


350-468□

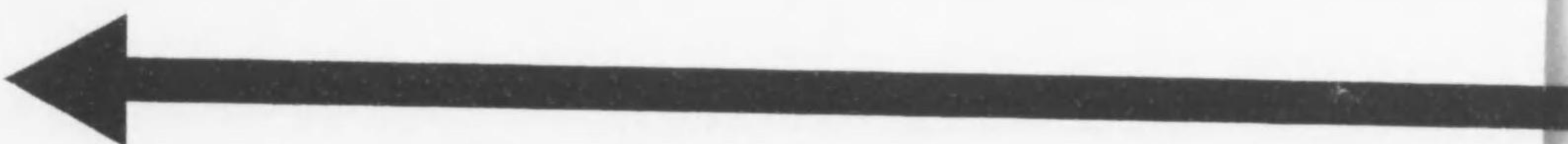


1200501406541

〇
複
写



始



15.9.16

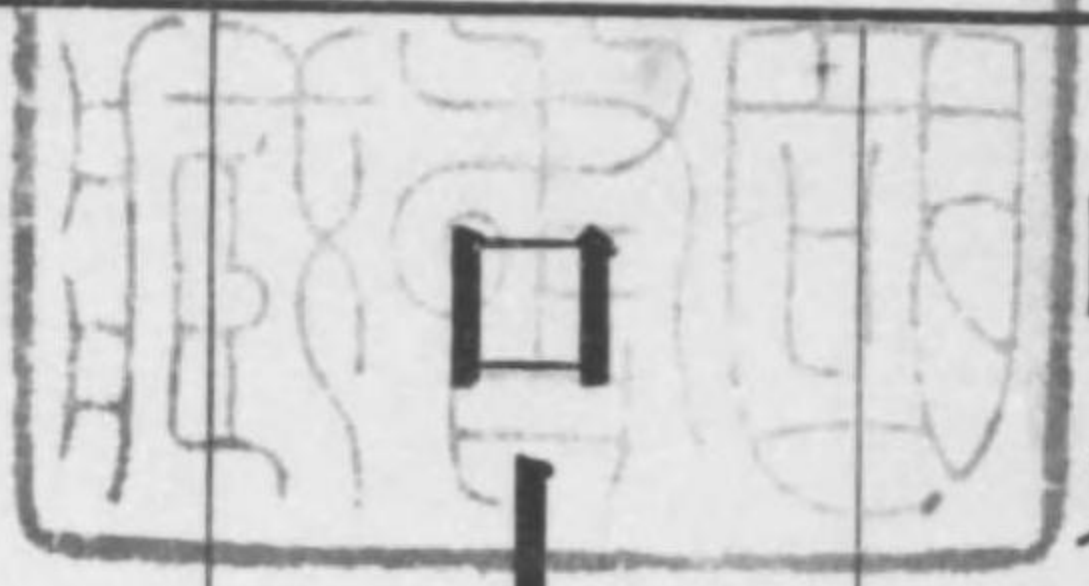
RÔMAZI-KOKUZIRON

田丸卓郎著

ローマ字國字論

岩波書店刊行

200



田丸卓郎著

口一マ字國字論

岩波書店刊行



初版のはしがき

『國字問題は國語學者の問題である、それを國語學者でないものが論ずるのは心得違ひだ』と云ふ人がある。併し現に此問題について實行方面まで熱心に努めて居る人は國語學者には却て少く、國語學者でない人に多いと云ふ事實から考へて見ると、この問題は國語學者のみの論ずべきものだ^とと云ふ論が當つて居ない事情が事實^上あるに相違ない。今それらしく思はれる事情を書いて見ると、

(一) 國字は國民全體の日常使ふものであるから、實地その使用者と云ふ點では、國語學者と否らざる人との差別がない。否、廣く言へば凡ての國民は國語學者だと云つてもよい。それ故に使用上の差支や不便などから國字問題に考を向ける點では所謂國語學者と國語學者外の人との差別がない。

(二) 一般の國語學者は、現在の書き方で書いた國語を取扱つて居てそれが商賣だか

ら、變つた書き方に考を及ぼす機會は却て少い。各種の學者でも又實業家でも、外國語に接する機會の比較的が多い人は却て變つた書き方に考を及ぼすことの多いのは自然の理である。

(三)特に吾々理學者は萬國の性質を持つて居る事を取扱ふのが商賣だから、さういふ事に冷淡な人は別として、多少注意する人には外國語と日本語との比較が頭に湧いて來る機會は常にある。そして、凡て物事の真相を捕へるのが理學者の本領だから、國字問題が特に多く理學者に論ぜられることは寧ろ自然の勢である。

(四)理窟上國字改良の必要を知つて居る國語學者も、今の儘で別に自分の不利益にはならないから、その必要を直接に感ずることはないが、我々理學者は絶えず外國の同業者と、書いたもので接して居るから、國語の現在の書き方の爲に不利益を蒙ることを常に感ずる(さういふ點に注意しない人は別として)。

(五)直接必要を感じない人は、假令理窟では有用なことを認めても、面倒なこと

は後に廻すやうになるのは無理もない。必要を感ずる人はさう云ふ側の人のすることを待つては居られない。従つて面倒なことを自分で處理してでも早くその必要に應ずることを試みるのも自然なことである。

ざつとかう云ふ事情かと思はれる。

國字問題は次に述べるやうに國家の大勢から見て極めて要用な而も急を要する問題である。それを、熱心にはやりさうもない國語學者に任せて置くことは、國家の上から見ても大きな損で、國語學者外の人熱心にそれを論ずることは大きな利益である。自分は、此意味で國家の爲にも要用な仕事をして居ると云ふ信念を以つて、自分の専門以外の此事に當つて居るのである。

勿論茲に述べたのは國語學者は此問題に關係しなくてよいといふ理由ではない、只、現在國語學に屬すべき問題であるに拘らず國語學者が多く之に注意しない、又は注意しても熱心にやる人が尠いといふ現在の状態の説明をしたのみである。併し

かゝる状態は決してよいことではない、國語學者諸君は假令差當ての必要は感じなくとも先きに立つて此要な問題を研究して呉れられねばならないと思ふ。

併し又同時に、國語學者ならざる一般の人々に希望したいことは、此問題を國語學者に任せると云ふことにしないで、凡ての日本人がそれに考を向けて、實行方面に注意してほしい點である。本文にも論ずるやうに、主な問題は理窟にはなくて、讀み慣れる、書き慣れると云ふ點にあるから、如何なる職業を持つて居る人でも、普通の新聞雜誌を讀むと同じ意味、同じ暇を以てローマ字文を讀みなれるやうに、又日常の書き物を成るべくそれで書くやうにするだけで、此重要な問題に對して仕事をして居ることになるのである。

大正三年十月

著者しるす

第三版を出すについて

大正三年に本書を出してから、七年餘で大正十一年の初に附録に「假名論とそれの批評」を加へて再版を出したが、それも一年前に賣盡したので、第三版の催促が切りに來る。しかし、初版以來十五年にもなるので、出すとなれば書き加へるべき事項もいろいろあつて、中々其運びにならなかつたが、去年の夏休とこの冬休とを利用してやうやくこれだけに纏めることが出來た。

この十五年餘の間に、世間の人の國字問題に對する理解が進み、理論よりも實行に重きを置くやうになつたのに鑑み、本版ではローマ書きに關する實行方面の事柄——綴り方問題、切り續け問題、其他ローマ字の應用方面の事、國字問題解決の順序など——を前版よりも多く書き加へてある。また附録には、増島六一郎氏と松岡静雄氏のローマ字反對論及び野上俊夫氏が其後に出した假名論の批評を加へてある。

このやうに、國字問題が次第に世間から眞面目に取扱はれるやうになつて來たとともに、大正九年には選舉にもローマ字投票が公に認められ、最近には海軍省並に陸軍省で部内一般に對して本書で主張して居る日本式ローマ字と同じローマ字書き方を公に制定されるやうになつた。

これは時勢の進歩と同志の人々の努力とによることで、喜ばしいことではあるが、併しまだまだ本書が世間に不必要になる程度にはなつて居ない。否、吾々はこの時勢に乗つて尙一段の努力をして、ローマ字國字論並に日本式ローマ字の聲を一般的にしなければならぬ。

昭和五年一月

著者しるす

目次

第一篇 國字問題

第一章 國字問題の起る所以——漢字の批判……………一

一、漢字の爲に國民の受けて居る損。二、日本語の性質から見た漢字。三、日本人の思想
徳義心と漢字との關係。四、漢字漢文が簡潔崇高莊重だといふこと。五、國字問題の意味
と古典の取扱ひ方。六、此章の要領。

第二章 漢字制限の批評……………三

第三章 假名とローマ字との比較……………三七

一、假名論の種類。二、假名の利益と思はれて居る事柄。三、日本語の性質から見た假名

目次

とローマ字。四、読み易さの問題、字の形から見た假名とローマ字。五、外国、外国人、外国語に關すること。六、固有の字と世間並の字。七、改良假名の問題。八、第四種の假名論及び新字論。九、結論。

第四章 ローマ字を國字とすることの利益

一、教育の經濟。二、日本語の正當な發達。三、書き物及び印刷に關する便益。四、印刷物の面積に關すること。五、郵便電信商賣品に關すること。六、日本語の世界的發展。七、他の國民との思想感情の疏通。八、此章の要點。

第五章 ローマ字採用に關する懸念及び批難

一、讀みにくいといふこと。二、同音異義の語が分らないといふこと。三、漢語系統の語の教へにくいこと。四、古典的文學の連絡の斷たれる懸念。五、思想徳義心の養成に關する懸念。六、文章が冗長になるといふ批難。七、印刷物の面積に關すること。八、支那と文字の同じことから得る利益を失ふといふ懸念。九、ローマ字使用は外國語の濫用獎勵に

なるか。

第六章 ローマ字の綴り方問題

一、綴り方の證義の必要。二、日本式綴り方。三、實際上の利害。四、日本式綴り方が日本語の性質に合つて居る證據。五、國語の正字法に關する一般的考察。六、五十音と日本式綴り方。七、日本式綴り方と假名遣ひ。八、英語や外國人に關する點。九、外國の如音如音などの書き方。一〇、ウ列の音にロを省く説について。一一、結論、日本式の過去と將來。

第七章 ローマ字に關係した其他の問題

一、字の名前と順序。二、綴り方の特別な問題。三、人名地名等の書き方並にABC順配列。四、外國語の書き方。五、ことばの種類。六、切り續けの一般的規則。七、名詞に大文字を使ふこと。八、ことばと言ひ方。

第二篇 日本語の世界的書き方

第一章 一般論

.....一八八

- 一、日本語の世界的書き方は現在既にローマ字である。二、英語式ローマ字の批判。三、日本語固有のローマ字綴り方。四、最新の言聲學者の日本式に與へた裏書き。五、日本式は同時に萬國的存在である。六、日本式は既に使はれて居る。七、日本語の世界的書き方は日本式ローマ字。八、英語關係の方面に於けるローマ字綴り方。九、結論。

第二章 應用されたローマ字

.....二〇六

- 一、日本人の名前の書き方。二、團體會社學校などの名前。三、土地の名前。四、名簿、圖書目錄、索引の列べ方。

第三篇 國字問題解決の順序

第一章 一般論

.....二二八

- 一、法律にたよることの可否。二、小學校にローマ字を入れること。三、國字論を先決問題とする必要はない。四、世界的書き方の發達。五、有效と宣せられたローマ字投票。六、國字がローマ字に移り行く徑路。

第二章 細目論

.....二四六

- 一、實用の方面。二、小學校の方面。三、研究方面。四、他の國字論者との關係。五、吾々のなすべきこと。

附録一、ローマ字反對論とその批評

.....二七一

市村瓚次郎氏の「羅馬字論者の反省を望む」。菊池謙二郎氏の「羅馬字問題」及び同(再論)。「東亞研究」のローマ字反對論。増島六一郎氏の「漢字排斥論と羅馬字論者」。松岡靜雄氏著「日本語學」中の評語。

附録二、假名論とそれの批評……………三九

- 一、中村春二氏の假名論。二、山下芳太郎氏の論。三、高尾謙一氏の「ホソジ」。四、野上俊夫氏の假名論。

第一篇 國字問題

第一章 國字問題の起る所以——漢字の批判

一、漢字の爲に國民の受けて居る損



今日主として行はれて居る國語の書き方は、漢字と假名とを使ふ方法で、漢字の方が殊に要用な語を書く用をして居る。然るに、其漢字の讀み方には簡単な規則と云ふものがなくて、一字一字別々に讀み書きを習はねばならない。否一字の讀み方が一つならばまだしもだが、例へば行と云ふ字は、上に孝がつけばコと讀み、上に苦がつけばギョと讀み、ユクと讀み、ヤルと讀み、オコナウと讀み、人名にな

るとツラと讀んだり、行脚行燈になるとアンと讀む。生といふ字には讀み方が二十幾通りかあると云ふことである。かういふことは行や生に限つたことではなくて、凡ての漢字が、多少の差こそあれ、皆いろいろ異つた讀み方を持つて居る。又書く方でも同じことで、例へばみると云ふ一つの日本語を書くのに、見か覺か觀か看かなど、考へなければいけない。これ等のことについては次の節で尙論するが、とに角漢字日本語の讀み書きの複雑さは實に不可思議といふ外なく、これほど煩はしい讀み方書き方は世界中日本以外どこにもないのである。

このやうに複雑極まる漢字一字一字の稽古や讀み分け使ひ分けは、現在の書き方が行はれる以上、どうしても一々我々の學ばねばならないことで、我々の學校教育の大きな部分をその爲に使つて、大學を卒業する程になつても、まだ覺えきれなかつたり、幾度も骨を折つて覺えたことも思ひ出せなくて急の間に合はなかつたりするのである。さて、これを知つた處で何の役に立つかと云ふに、只人に笑はれず

に讀み書きが出来ると云ふことの外に何の役にも立たない。字の讀み分け使ひ分けを知つて居ても、道德上の修養にもならず、數學理學のやうな實用上の知識の足しにもならない。

一體、語は人の思想を表はす爲の道具で、字はその道具を寫すだけのものである。智識思想は無論大事であるし、又語は各國民に固有のものであり且つ國民の思想感情と極めて親密な關係のあるものだから、それは勝手にかへられないものであるが、字となると、其語を寫す爲めに人爲的に作つたものに過ぎないから、どうでなければならぬと云ふものではない。現に、日本語の昔の字は支那の字を其儘借りて其音によつて日本の音を寫した萬葉假名であつた。其漢字は、云ふまでもなく日本人に固有なものではなくて煩はしい借物であつた。又現今使つて居る漢字とても支那人からの借物である點は同じことである。

思想智識を中身とすれば、語はそれを入れてある重箱のやうなもの、字は其重箱

を包む風呂敷位なものである。我々が漢字の読み書きや使ひ分けに苦勞して居るのは、風呂敷の詮索にばかり暇どつて、肝心な中身をお留守にして居るやうなもので、随分馬鹿氣た話である。

今の世の中は世界各國國民の實力の競争の世の中である。正味のある學問をすることの競争、其學問を應用して國力を増進することの競争に敗れるものは亡びるより外に仕方がない。我々が無意味な風呂敷の詮索をして居る間に、外國人は中身の學問をしてそれを應用することに日も足らない有様である。こんなことで我々が外國人に對して競争が出来るだらうか。

手近な一例を舉げて見るに、専門家の話によると、日本の小學校六年間の讀本の材料を獨逸あたりの小學校の同年限の讀本の材料に較べると、僅かに六分の一位しかないといふことである。日本の子供が一の知識を得る間に獨逸の子供は六の知識を得るといふのである。國民一人一人が盡く此通りの不利益を受けて居るとして國

家全體のことを考へると、外國に較べて差の餘りにも大きいことに驚かされるではないか。こんなことで我々は外國人にまけないで行けるであらうか。

先年日本を視察に來た米國の實業家が向ふへ歸つての報告の中で「日本が漢字を使つて居るうちは恐れるに足りない」と云つたさうだが、實際それに相違ない。

漢字のある爲に國語の學習に力を取られることは小學校に止まらず、尙高等の學校まで崇つてゐる。その爲めに、學問する日本人がどれだけ損をして居るか分らない。近年日本人の學問の爲に費す年限が長過ぎるといふことが論ぜられて居るが、學問の年限を縮めることの困難だといふことには、漢字が最大な原因をなして居ることは、上の小學校の事情を見ても疑ふ餘地はない。

一體、漢字の爲めに日本人が損をして居る事は學校生活の間だけではない。吾々個人が書き物をするときに、字の形を忘れて居るために手間のかゝることなどは別として、實業家は各種の業務書類で、軍人は軍事通信で、外交官は國際會議などの

書類整理で、凡て日本人は漢字を常用として居るために外國人と同等な働きが出来なくて、いつも勞多くして效少い情態に甘んじて居なければならぬ。

この他にも日本人が漢字の爲に蒙つて居る害はいろ／＼な方面に亘つて居るが、それは第四章で述べるとして、こゝには教育上の效果の少いことを主として説いたのである。

上のやうな心細い有様を救ふ方法は何にあるかといへば、日本語を書く方法を簡単にするより他にない。即ち漢字を止めて、書いてあるものは必ず讀めるやうな字即ち音文字を使ふことにするより他にない。學問の年限短縮なども、それによつて最も容易な解決を得ることは明かである。

音文字といふ點では、假名とローマ字とが略同等な立場にあるが、第三章で十分に述べる理由に依て、吾々はローマ字を使ふことが最良の方法であることを信ずるのである。

二、日本語の性質から見た漢字

前の項では漢字の爲に吾々の蒙つて居る損を述べてそれを止める必要を説いたが、併し若し日本語が性質上漢字で書くべき筈のものであつてもあるならば、それが損だからと云つてそれを止めることが無理だといふやうなことになるかも知れない。それで、今漢字が性質上日本語に對してどんな關係に立つて居るかを考へて見る。

今の日本人には日本語は（文法上の關係を表はす所に使ふ假名の外は）當然漢字で書かるべき筈のものだと思つて居る人が多いやうである。併しそれは習慣の爲に注意力が接へて居る爲にさう思ふので、注意して見ると、さうでないことを發見する。先づ漢字を使つて居るについて吾々の出會ふ不都合を列べると、

（一）書いてあることが儘には讀めない。例へば日の字があつても、ヒかニチかジツかカカ分らないと云ふ類は、殆ど凡ての字に就てある。尤も、意味のある普通の

文章であると、多くは他との關係で判断がつくが、兎に角一つの字を見ても、それを語にかへることが出来ない。地名人名に至つては、分らない方が普通で、分る方が除外例と云つてよい。學文路、及位、放出、雜餉限のやうな初めから讀めさうもないのはまだ無難な方で、石原(イサ)栗田(クンダ)など普通の讀み方をして思はない失策をする例も珍しくない。

(二)宛て字。矢鱈、矢庭、真面目、兎角、目出度、流石、生中の類。矢鱈は矢にも鱈にも何の關係もない事柄であるから、漢字が意味を持つて居るのが特長だと言ふ其特長がない。

(三)普通に使ふ立派な日本語が書けない。ワカル、ハイル、キマル、スケル、アルク、コナレル、ムヅカシイ、ヤサシイ、アヤフヤ、スグニ、シルシなどは、いづれも、高貴な方の前で云つても差支ない立派な日本語であると思ふが、それを書かうとすると、書けない。ワカルは分るとも判るとも書くが、何れも多少無理で

ある。「學校へハイル」は「學校へ這入る」とは書かれまい。極るはキワマルであり、定まるはサダマルであるから、キマルと書かうとするとときに困る。スケル(「書いてスケル」持つてスケル)などの)を助けると書くとタスケルだからいけない。シルシは多く印の字を書くが、これはインで意味から云つても適切でない。上に出した字には皆このやうな困難があるが、他にも澤山同様な例がある。

(四)讀み誤られる。メグリと書かうと思ふとき周りと書くと、マワリ又はグルリと讀まれる虞がある。コマイと讀んでもらふ積りで細いと書くとホソイと讀まれる。止メルはトメルかヤメルか分らない。彈いてはヒイテともハヂイテとも讀める。側(ソバ)かガワか)、調へる(ト、ノヘル)かシラベルか)、急(イソグ)かセクか)、上(ノボル、アガル、タテマツル)、下(クダル、サガル)、斷つて(タツテ、コトワツテ)、後(ノチ、ウシロ、アト)、限(ギリ、カギリ)など皆同様な例である。

(五)書き分けねばならない。ミルと云ふ日本語を書くのに、見覽觀看などいろく

あり、キクに聞聽などいくつもある。此等の書き分けが中々むづかしい。これ等が主なものであらう。

此等の例は稀に出て来る除外例であるから、それで全體を論ずるのは不當だと云ふ人もあらうが、深く考へるとさう大雜把には云はれない。

先づ實用上から云へば、(二)の宛て字は、つまらない面倒でも兎に角それで間に合つて居るからよいが、(一)(三)(四)などは實地の差支を生ずる容易ならぬ問題であるから、もし立入つて考へよう。

(一)に就て注意すべきことがある。同じ漢字でも、支那語に於ける漢字は、その読み方がきまつて居る爲に、書いてあるのを読むことが出来るから、字の用を達して居ると云へる。然るに日本語に於ける漢字は、読み方がきまつて居ない爲に、書いてあるものを語に直すことが出来ないから字の用を達して居ないと云はねばならない。友人の旅行先の地名が漢字では分つて居りながら、読み方が分らない爲に、

急用があつても電報が出せなかつたり、電報配達夫が「東海林」といふ門札を見ながら「シヨージ」といふ受取人は肩書きの番地に住んで居ない」と云つて差出人へ電報を戻したりすることは、この「字の用を達して居ない」ことの動かせない現實の證據である。

(三)に就ては、人によつては、漢字で書けない語は假名で書けばよいと云ふが、一體、名詞、動詞、形容詞等の要用な語には漢字を使ふのが例であるから、どんな文章ならば知らぬこと、謹んで書くべき文章には、ワカル、ハイル、コナレルなどと假名では書けない。勢、了解するとか入るとか消化するとか云ふ語にかへて書くことになる。正常なよい日本語を避けねばならない書き方が日本語の正常な書き方だといふことは、どうしても云へないことである。

(四)で、メグリとグルリ、ホソイとコマイ、トマルとヤメル等は日本語では確に各二つづゝの全く異なる語であるのに、それを表はす支那の語が周、細、止各一つで

あるばかりで、日本語の書き方の區別が出来ないのである。主客轉倒と云はうか何と云はうか奇怪なことである。(ホソイの支那語は織であつて細ではないさうであるが、こゝでは日本語に於ける使ひ方に従つて論ずる)。

(五)の聞く聽くなどの書き分けは、人によつては、「漢字の爲に意味を區別して使ふから、日本語が進歩したのだ」と云ふ。これは丸で見當違ひなことである。日本語は(字を幾通りにかへても)キクならキク一つである、只それに對する支那の語が用途によつて二つの場合を區別するだけのこと。支那の語では、それが丸で違ふ語であるから字も違ふのが當然であるが、日本語は一つであるから一つにするのが當然である。無論支那の語のどちらに當るかを示して置くだけ意味の區別が出来て居るから、只キク一つよりは意味が精密ではあるが、それは日本語以外のことでは示された區別で、日本語を書くといふ點ではいらないことである。

つまり、吾々は漢字を使ふために、正當な日本語を使ふことを控へたり、異なる日本語の書き分けをなし得なかつたりして居るのに、他方に於ては、一つの日本語を種々に書き分けるなどと云ふ無用な苦勞をして居る。

一步進んで、此等の變なことは何から生じて居るか、それは何を意味するかに溯つて考へたい。

一體、漢字は支那の字であると同時に支那の語である、即ち意味のある語である。それ故に、例へばヒトと云ふ日本語を人と書き、又それをヒトと讀むのは、ヒトに對する支那の語と字を搜し出して人と書き、又支那の人の字に對する日本語ヒトを搜してヒトと讀むのである。即ち書くときに支那語に反譯して書き(支那通りの讀み方はしないまでも)、讀むときは再び日本語に反譯して讀むと云ふ手續をして居るのである。かく二重の反譯をするから、種々の場合が起つて來る。

(イ)日本語に相當する支那語が只一つあり、其支那語に相當する日本語が只一つあ

ると云ふ場合には論がないが、其他の場合には差支の起るのは止むを得ない。即ち

(ロ) 丁度日本語に相當する支那語がない場合には書きやうがない(上の(二)及び(三)の場合がそれ)。

(ハ) それがあるときには、支那語でそれ等のうちどれを使ふ場合に當つて居るかに従つて、(日本語が一つであるに拘らず) 書き分けをせねばならない(上の(五)の場合がそれ)。

(ニ) 其支那語に對する日本語が二つ以上あるときは読み方が分らない、止をトメルともヤメルとも云ふやうに(上の(四)の場合がそれ)。

それに漢字を昔の支那の音のまゝに讀むことを許すから、(イ)の最も簡單な場合も音で讀むか訓で讀むかでつまり(ニ)の場合になり、又此等の場合がいろ／＼組合つた複雑な場合も出て來る。

要するに、上のやうないろ／＼な不都合な場合のあるのは、偶然な事情によるの

ではないで、支那人の語を通して二重の翻譯を以て書き讀みして居ると云ふ事情から當然起るべきことである。

かう云ふわけで、日本人は自分の語を讀み書きするのに、一々一旦(昔の)支那人の語に反譯して書き、次に再び自國語に反譯して讀むといふ手數をして居るので、書く漢字は、最初の反譯をした時の形であるから、それは支那の語を書いたものでこそあれ、日本語を書いたものではない。従つて、漢字は日本語の書き方として甚だ不自然なものであつて、日本語と離るべからざるものでも何でもない。寧ろ音文字で日本語をその儘書く方が、遙に、日本語を書くといふ目的に協つてゐる。

注意。こゝに論ずるのは、日本語の中に漢語を使ふのがよいとか悪いとかといふ問題とは全く別問題である。漢語の原は漢字であつても、耳に聞いてわかる程度の漢語は使つてかまはないし、且つそれは音文字で書いてわかるはずである。(聞えてわからないやうな漢語は、日本語として問題である、このことは第五章の二

で詳しく論ずる)。

三、日本人の思想徳義心と漢字との關係

日本人の忠義孝行其他の思想が、忠とか孝とか云ふ漢字で養成されるから、漢字を使はないことにするのは道德思想を危ふくするものだと言ふ人がある。若しさういふことが事實であるならば、これは國字問題に取つて重大な關係を持つものだと云はねばならない。

しかし、かういふことを云ふのは大抵昔の漢學を主にして育つた人や昔風の漢學専門家であつて、比較的若い人の間では——思想の健全著實な人の間でも——其やうな考は殆どなくなつて居るといふ事實から見ても、これは一種の捕はれた考であることが推測される。私の考では、此等の語が吾々に其の意味を感じさせるものは、目に映ずる漢字の形ではなくて、其の音即ちひびきである。若しそれが漢字の

形だといふならば、漢字を見ることの滅多にない下層の人や、特に盲人には、此等の思想が丸でないか、あつても非常に弱い筈であるが、事實上決してさうではない。學問をした上流の人に却て種々の忌むべき犯罪者があるのに、下層の人は比較的純粹無垢な徳義心を持つて居る。盲人にも思想徳義心の立派な學者があつたばかりではない、一般の盲人について見ても「盲人は平均して徳義心が薄い」といふことではない(盲人が一般に教育を受ける機會が少いことや、周囲との交渉に於て不利益な事情にあることを考へると、むしろ漢字に煩はされないだけに徳義心が養はれ易いのだと云へるらしく思はれる)。又、講釋師の講談の赤穂義士傳などいふものが忠義孝行の感じを與へることは決して一通りの道德の書物の及ぶものではないが、其講釋師は決して漢字を書いて見せはしない。此一事などは上に述べたことの最も明な十分な證據だと思ふが、も一つ他に、漢字を見てそれと吾々の感ずるのは、其形から直接に感ずるのでなくて、一度口か頭かの中でそれを讀んで、その讀み聲から

感ずるのだといふ實證がある。南北朝の歴史を讀んで居る中學生徒などが直義とあるのを見て、これをチヨクギと云ふ意味の有難い語だと感ずる人は恐らくあるまい、これを見ると直にタヨシと云ふ奸傑が頭に浮んで来る。秀吉といふ字を見て、ヒデヨシだと思へばこそ太閤らしい感じがするが、ヒデキチと思つて見ると平凡な人間の氣がして太閤の感じはちつとも出て來ない。これ等は誰でも經驗する實際上の事實だと思ふ。

これで見ると、漢字が其形によつて人に道德的その他の感じを直接に與へるものと云ふことは、漢字の買被りで、實は人がそれを讀んで一定の音に於てから感ずるのである。

それ故に、漢字を日用文字外に放逐しても、それが示して來た德義上の觀念等は更に變るものではない。否、却て現在は漢字を見て判讀（チヨクギかタダヨシか、ヒデヨシかヒデキチかを判讀）の後に漸く其語の與へる感じを生じて居るのが、ローマ字になれば判讀の手續なく、誤なく其語の與へる感じを生ずるだけ一段の進歩をみるわけである。（尤も、それにはローマ字を讀みなれることが必要であるが）。

四、漢字漢文が簡潔崇高莊重だといふこと

漢文を讀み慣れて居る人の中には、漢文が簡潔崇高莊重と云ふやうな性質を持つて居ると云つて大變それを珍重する人がある。そして假名やローマ字ではそのやうな文章が書けない點から、國語の書き方としてそれ等が不十分なものであると思ふやうであるから、ここにそれについて私の考へることを述べたい。

此點については、第一に、漢文は本來外國文であつて、日本語ではないことを注意せねばならない。従て又、漢文を假名交りに直したのは外國文の直譯文であると云はねばならない。そんなものは無論正しい日本語であり得るわけではない。漢文口調の假名交り文は、漢文の直譯文に似せたもので、鵝的なものである。このやうな

文章が簡潔崇高莊重など、感ぜられるのは何によるかと云ふに、私の考へる處では、前項と同様漢字の效能を買被つて居ることが一つ、漢文が本來外國文であるから、日本人の中でえらい人へのみ取扱はれることが一つ、外國文であるから、その感じ（話のまゝの日本語のやうに）直接には來ないで、讀む人の想像に助けられて了解されると云ふことが一つ、此等三つの事情が主な原因となつて、それに尙長い間の習慣が加はつて、さういふ風に感ぜられて居るのであるらしい。

漢字の效能を買被つて居るといふのは、例へば「殺身成仁」と云ふ格言で云へば、漢學者は此漢字の行列を見なければそれらしい感じを生じないと思ひ込んで居るらしいことを云ふのである。我々普通の人間は矢張「身を殺して仁を成す」と讀んで始めて其意味を感じる。讀んで格言の意味を感じるのは、漢字よりも其語、耳に聞く日本語（直譯文）に感じの原因があることの證據である。格言に限らず議論文でも叙事文でも、漢文は讀んでそれを面白いと感ずるのが事實だと思はれるから、面白い

と思はせる正味は語にあつて字にない。語にあるならば、それをローマ字で書いても差支はないわけである。尤も、今すぐローマ字に寫しては、多くの人はローマ字に慣れない結果、讀むのに骨が折れ、讀み返さねばならないと云ふ點から、感じの起り方が鈍いと云ふ弱點があるのは止むを得ない。併しこれは慣れないことの結果で、音が主である以上は、漢字の形が肝心なものでないことは争はれない。

このやうに、通常漢文の長所と思はれて居る性質の源ミナトは漢字にあるのではないに拘らず、此性質を發揮して居る文句には、云つて分ると云ふ性質に乏しいのが多い、特に簡潔な文句には言つて分らないのが多い、即ちいはゆる簡潔な文句は、日本語としては簡潔過ぎるのが普通である。言つて分らないものは日本語として、不適當な文句であるが、これも實は、元來漢文は外國文であるのだから、寧ろ當然なことである。

そこで、問題は、このやうに日本語として不適當な半外國語を、その長所と思

はれる特殊な性質の爲に日本語に使ふことが果して正常なことであるかと云ふ點に
なる。

一體、漢文が莊重だなど、云ふが、それを本家本元の(今又は昔の)支那人に云はせ
れば日常の語である。外國人の日常語を莊重だの何のと云つて有難がつて居るの
と思へば、甚だ可笑な次第である。これは本來は莊重でも何でも無い平凡極まるも
のであつても、日本へ來れば學者の間にのみ行はれて居たと云ふ點と、それが外國
語だけに、直接に其儘感得されない處から、霞のかゝつたものが奇麗に見えると同
様な事情とで、高尚なものになつてしまつたのではあるまいか。平凡な英國人又は
獨逸人でも、日本へ來ると、立派な英學者獨逸學者よりも英語獨逸語を上手に話す
からえらい人になつてしまふ(此頃ではかういふことも大分少なくなつて居るやうで
はあるが)と同じ氣味合があるのではあるまいか。その平凡さが(交通の不便で
あつた昔は今よりも尙一層)感ぜられ悪いから、想像も手傳つて、えらいもの面白

いものになつてしまふと云ふことは實際の事情に當つて居るらしく思はれる。

英語や獨逸語でも、半可通の間には、却てそれが餘程の特殊の面白味を持つて居
るやうに思はれる傾があると思ふが、漢文の面白味有難味もつまりそれと同様のも
のではあるまいか。例へば河の流れる貌を洋々と云つたり、山の聳えて居るのを峩
々と云つたりするのは、何れも日本人の話に使はない語であるから、全く支那人の
語である。それを假名交り文の中に書くのは、英語や獨逸語を入れるのと差はない。
それを面白い形容詞のやうに思ふのは、つまりよく分らない英語や獨逸語を入れて
得意がつて居るのと同じ性質のことであると云つて差支はあるまい。

要するに、漢文が一般に崇高とか莊重とか思はれると云ふことは、漢文の本來の
性質にあるのではない、日本に渡つてからの事情によつて表面に付いた性質と思は
れる。元來平凡なものが意味深長なものになつたり、平氣で云ふことが莊重崇高に
聞えたりする、その主な原因は外國語だといふ點で、それにそれを教へる日本の

學者の氣分が色取りを與へたのであらう。

このやうに、漢文漢語の莊重とか崇高とかいふことが正味の性質でないといふことは、心ある人には段々分つて來て居ると思ふ。以前は話の中に漢語を多く交せて使ふとえらさうに見えることを有難がつて居る人が多かつたが、今ではこれは田舎の半可通に多くなつて、物の分つた人には少くなつて來たのは喜ぶべきである。文章の方面では、今まだ話の方ほど開けては居ないが、併しこれもいづれは話の方と同じ筋道を通つて行くべきは明かであつて、今多くの人が、漢語が文章を莊重にするなどと考へて居ることは、やがて半可通の使ふ漢語と同様、笑ふべきこと、一般に感ぜられるやうになるに相違ない。假令現在は漢文口調が莊重の感じを人に與へて居るとしても、その原因が右のやうなもので、正味のないものだとするれば、この金箔はやがて剥げるにきまつて居る。さう云ふ金箔的のものを後生大事にして居ては、日本語の發達も何もあつたものでない。

このやうに考へれば、このやうな半外國語の便宜を圖つて、國字問題を加減する必要は更でない。我々は鵠的な漢文口調の金箔的の面白味などにだまされないので、どこまでも眞の日本語を主として發達を圖ることが肝要である。

吾々日本人には、口で云ふ儘の日本語が眞の言表し方で、其他のものはつまりはだめだと云ふことは、少くとも私の經驗では、手紙の文句でも分ると思ふ。一體吾々は候文體で手紙を書くにきまつて居るやうに教へられて來たのであるが、談話體で手紙を書きつけてから、候文を書かうとすると、どうしても本當の感じが手紙に寫らない、表面を飾つた偽りの文句のやうにしか感ぜられない。

普通の文章に於ける漢文口調もこれと理窟がちがふわけではない。漢文口調に没頭して居る間は、それが當り前で、それでなければいけないやうにも感ぜられようが、一步それから出て眞の日本語の直接に與へる本當の感じを知るに至れば、必ずや漢文口調なるものが、日本語としては、うはべをこしらへた偽りのものであると云ふ

ことを感ぜずには居られない。一旦かう云ふことに気がつけば、上にも述べたやうに、莊重崇嚴と思つて居たことも寧ろ滑稽に感ぜられるやうになるのは蓋し自然の勢である。

五、國字問題の意味と古典の取扱ひ方

✓ 我國の古典的文學書が漢字で書いてあることに對して國字問題はどういふ見方をするかといふことも大切な問題である。

我々が茲に國字問題と稱へて漢字を止めてローマ字を使はうと云ふのは、日用文字として漢字を廢しローマ字を使ふと云ふだけで、漢字を日本國中から皆葬つてしまはうと云ふのではない。こんなことはしようとしても出來ないことであり、又望ましい事でもない。

ローマ字が十分に行はれるに至つた後の最終の状態に就て云へば、日本の古典的

欠

欠

ならないから、初めは誤りであつても、其誤つたのが一般的になると、其誤つたのが却て標準になるのも致し方がない。併しこれは、漢學と云ふ側から見れば、決して喜ぶべきことではあるまい。このやうに、昔からの正しい書き方使ひ方と今の書き方と衝突するやうなことの出て來るのは、漢字が日用文字であるから起つて來るので、漢字から日用文字と云ふ役目を免じて、漢字は漢學専門の字にすればこんな困難はなくなる。この意味に於て、ローマ字採用は却て古典的漢學の健全な發達を助けるものだといふことが出来る。

六、此章の要領

要するに、吾々日本人は漢字を日用の文字として居るために、他の國民に比して教育上其他に驚くべき不利益を蒙つて居るので、吾々はこれを改善する方法を講じなければならぬ。それには漢字を止めるのが第一必要であるが、それが許される

かどうかを調べて見るに、日本語の性質から研究すると、漢字は寧ろ日本語に適當な文字であることが知れる。又漢字に關係して日本人の生活に重要な關係を持つらしいいろいろな方面を研究すると、漢字を是非引續き國字として使はねばならないといふ事情は一つもない。

それ故に、日用の文字として漢字を止めて音文字を使ふがよいといふことは、もはや疑ふべき餘地のないきまつた問題である。

第二章 漢字制限の批評

漢字制限は、文部省の臨時國語調査會で評議したのを初めとして、有力な新聞社でも採用して居る方法で、所謂常用漢字二千字乃至三千字位を定め、それ以外の漢

字を使はないと定める方法である。そして、それ以外の漢字を使ひたいときには、漢字の代りに假名を使ふことにしてある。

この方法について先づ問題になるのは、世間の凡ての人が常用漢字以外の字を使はないですますることが出来るかの問題である。狐と猿は漢字で書くけれども、狸と猪はタヌキ、イノシシと書かねばならないと云ふ種類のことは、新聞社の活版部で活字を備へて置かないのでそれより外に仕方がないといふやうな場合の外、出來さうにも思へない。特に文藝物などでは、そのやうな不揃ひな書き方をしては書く人も讀む人も満足しさに思はれない。況や、人の姓名などでは必ずしも常用漢字だけに制限しないといふ特例を設けるとすれば、制限外の字もつまり人が學び且つ書かなければならないことになる(若し姓名も、常用漢字以外は假名で書けと云ふのならば、人の差別待遇と云ふことでむづかしい問題になりさうである)。

要するに、漢字制限の方法は、餘りにも無理な方法で、無理を通し得る場合の外、

一般向には行はれる望みの甚少い方法であると云はねばならない。

假にそれが註文通りに行はれるとしたところで、どれだけの效能があるか。新聞社などでは植字部が大に手狭で濟むことになつて歓迎されるに相違ないが、

(一) 小學校兒童の負擔——例へば外國の兒童に比べて餘計な骨折をして、六分の一のことしか學ばないといふやうなこと——に關しては少しも輕減される點がない、現在でも國定讀本に使はれる漢字は制限漢字と同程度のものであるから。

(二) 漢字が字の用をして居ないと云つた點、即ち書いたものを見ても確に讀めないことが多くて、讀めると思ふ場合も、實は前後の連絡によつて何を讀むかを判定する(この判定の能力を養ふ爲の無益な骨折の漢大なことも忘れてはならない)ことによつて辛うじて讀めるのであつて、字そのものだけで確に讀めるのは殆ど一つもないといふ點は、漢字制限によつて益悪くこそなれ、救はれはしないのである。何故悪くなるかと云ふに、制限によつて取入れられた字は、「字を習ふ勞を成るべく有效

にする」意味から、應用の廣い字、即ち一つの字を習へば、使ひ途の多くあるものである。これは、丁度こゝに云ふ點で最も字の資格の缺けてゐる字を撰んで使ふといふ方針になつて居るのである。人の姓名は制限外に置くなども、姓名は前後の關係で讀めない方の場合だから、漢字の工合の悪い場合が残されたことになつて居る。もともと漢字の不都合なのは、その字數の多いことも一つだけれども、書いてあることが確に讀めないと云ふ方がより重いのである。漢字制限は、その軽い方を(それも或程度まで)救ふだけのもので、重い方の缺點は寧ろ益ひどくする方法である。

要するに、漢字制限といふ方法は、一般的には行はれる見込の甚尠いものであり、假に行はれるにしても、國字問題といふ點から見れば、殆ど價値のない事である。

しかし、國語問題の爲には、漢字制限は二つの點から可なり大きな功績を擧げてゐると云はねばならない。一つは、漢字交り文が、むづかしい漢字を列べなくても

書けるものだといふこと、否、その方が寧ろよいといふこと、漢字がむづかしい場合には假名をあても書けるものだといふことを世間の人に知らしめたことで、も一つは、漢字を制限すると、自然に成るべく制限漢字で間に合ふやうな餉ちやさいい言ひ方を考へ出して書くやうになり、又制限外の漢字のはいつた語を假名で書いてよく通じない虞がある場合に、必要上それを音だけで紛れない云ひ方に書き改めることを研究するやうになつたことである。特に有力な新聞といふ勢力によつて、かういふことが實際的に行はれて居るといふことは、見逃すことの出来ない大きな功績である。そしてこの國語方面に於ける功績は、間接に吾々の國字問題にも大きな助けになることは認めなければならぬ。何故かなれば、このやうに日本語を成るべくやさしい云ひ方にすること、及び音だけでわかる言ひ方を求めるといふことは、下に（第七章の八、第四章の二）述べる通り、吾々の理想とする國字改良の爲にも最も必要な仕事であるからである。

第三章 假名とローマ字との比較

一、假名論の種類

現在の漢字假名交り書き方の弊害を救ふ爲に、音文字を使ふとすれば、假名とローマ字とが問題になるので、世間には假名を使ふがよいといふ人がかなりに多くある。それには

- (一) 現在の片假名を其まゝ、只幅や丈をかへ、語と語の間をすかす位の工夫をして、使はうとする人。
- (二) 右と同様に平假名を使はうとする人。
- (三) 現在の片假名の形を、誰にも認めがつく範囲内で、變へて、その缺點を救は

うとする人。

(四) 假名の認めぬむづかしいまでに、それを變形して、又は新に形を工夫して使はうとする人。

これ等四通りの種類がある。

世間に最も多くある假名論者は、この第一種即ち現在のまゝの片假名を使はうといふ人だと思はれる。併し、此等の人の議論の主な點は片假名と平假名とに共通であるので、次に述べる比較(二から六まで)は假名論一般に通ずるものである。

二、假名の利益と思はれて居る事柄

假名がよいと云ふ議論の一番強い立場と思はれて居る點は次の四つであると思ふ。

(一) 假名が現在日本中に知れて居る、従つてそれを教へる世話が入らない。假名なれば直にも使へる。

(二) 日本語にある音には父音だけのものがなくて、父音は皆母音と組合つて使はれる。かういふ音は、性質上から、假名で表はすのが一番適當である。

(三) 實際の使ひ途に、假名の方が便利である。最多くの場合に、假名なら一つですむ處にローマ字では二つ書かねばならない。

(四) 假名は昔から日本に固有な字だから、國家的の自覺とよい意味のほこりの上から都合がよい。

これ等について私の考へることを述べる。

(一) 假名は現在日本中に廣く知れてゐること、又それを教へる世話のいらぬことは誰も認める。併し、それ故にそれが行はれ易いかどうかは疑問である。法律か何かで、假名だけを使ふ規則が出来るとすれば、この事は假名の爲に都合のよい事に相違ないけれども、さういふ法律は出来さうに思はれない。自由な競争に任せてあるとすれば、假名は一般に知れて居る爲に却て弱みを持つて居る。何故なれば、假

名は現在「字を知らない」人即ち教育のない人の使ふ字になつて居るから、餘程わけの分つた人の外は、假名だけで書くことを好まないのが實際の状態である。此點では、無教育な人と一緒に見られるといふ嫌がなくて、しかも習ふに左程手数のいらないローマ字の方が好まれ且つ行はれる望みが多い。私は現にさういふ實例——漢字の智識の少ない人でローマ字で手紙を書いて居るといふ人——を聞いて居る。

それ故、(一)の點は假名の強みのやうで、同時に又弱みである。

(二)日本語の性質から見て假名とローマ字との比較は特に大切であるから、次の節三で別に述べるが、要するに假名が日本語に適當して居ることは上邊の見方で、深く調べるとローマ字の方が適當してゐることが明になるのである。

(三)實際の使ひ途に於て、假名が字数が少く、ローマ字が字数を多く要することも、それに相違ない。併しこゝでも、その一つ一つの字の形を考へることが必要である。讀むことは四の節で別に述べるからそれに譲り、書くことに就て云へば、片假名の

要な缺點は、その線がきれぐである爲に、始終ペンを上げたり下ろしたりすることが必要で、それが——特に早い書き物をする場合などに——思の外に手を疲らせる。これは、ローマ字を書きなれて居て、たまた片假名を書くときによく氣のつく事である。ローマ字はペンを上げる必要が少くて、この點では遙に優つて居る。字數や線の數の少いことばかりを見て假名が便利だと思ふのは考が足りない。

縦書き平假名は續け書きの點ではよいが、縦書きであることから生ずる不便(書くときに手にインキがつくことや、讀むときに目が餘計に疲れること)などは避けられない。

假名賛成者が假名の利益として主張するも一つの點は、タイプライターを使ふときに字數が少いから、手數が少くてすむといふことである。これも、字數の少いことには疑がないとしても、字の種類が多いこと即ち押しボタンの多いことから、使ひにくい指をも使はねばならないことと、紙卷臺を動かす鉤(シフトキー)を動かす

ことの多いことを考に入れると、吾々の使つて居る日本式ローマ字のタイプライターで凡ての普通の字(假名の五十に對して僅に十九字)を皆使ひ易い指で、而も字の續き工合に都合のよい位置に列べてあるのに比して、假名タイプライターの方が時間なり手数なりの上で都合がよいだらうとは考へられない。此點は實驗で比較して見なければ確なことは云へないけれども、私の見込では、實驗をして見たら多分ローマ字の方が勝つだらうと思ふのである。少くも、假名賛成者の云ふやうに字數の比較に現はれるほどの利益が假名側にあるのではないことだけは明である。

(四) 假名が日本に固有な字だから、それを保存して使ひたいといふことは尤なことである。併し、かういふことは物と世界の事情とによつて考へることが必要である。吾々は、言葉は國民にとつてかへられない大事な物、國民のいのちのうち的一部分と云ふべきものだから、其通りに保存することを努めるべき物であると考へて居る。そしてローマ字を使ふのも日本語の爲を考へるといふのが主な理由の一つになつて

居る。併し、字となると、それは言葉を紙の上に表はす符牒、即ち道具に過ぎないので、決して吾々のいのちのうち的一部分ではない、それを取かへることは決して無理だときまつて居るものではない。

この關係は次の事實からも十分に證據立てられる。吾々の若い時代には、殆ど凡ての學問(普通學)を英語で習つたもので、それ以來、英語に親んで居ることは殆ど絶間ないと云つてもよい位であるが、それにも拘らず、凡ての用事を英語で云はうとすると、吾々は非常な無理を感じる。ローマ字で日本語を書くことは、全體の年月から云つても、又其年月の間に實際その読み書きをして居た時間から云つても、若い時からの英語とは丸で比較にならない程短い時間であるのに、私はローマ字文を書くこと、ローマ字の文章を読むことに少しの無理も感じて居ない。否漢字假名交り文の方が、思ふ通りに書けないこと(第四章の二の後半參照)が始終ある爲に、却て無理を感じず。ローマ字文に一二年の馴染を持つて居るローマ字仲間には皆同様

な感じを持つて居る。これは、字をかへることが、言葉をかへるのところが、無理なことではないことの明な證據である。

字をかへることが假令無理でなくとも、これをかへる手数をする丈の利益がないならば、強いてそれをかへるには及ばない。若し、封建時代のやうに、國と國との交通を成るべく差止めて居る時代ならば、それが賢いやり方であるかも知れないけれども、現在の世界の事情では、却て相互の思想をよく了解し合ふことが必要であり、さういふことが國家の生存の爲にも大きな關係があるのであるから、字の方はさういふ事情に適するやうにかへることがよい、といふことには疑ふべき餘地がない、このことについては尙下(第四章の六、七)を見られたい。

以上(一)から(四)までを纏めて云へば、假名の利益と考へられて居る點は、何れも一應は尤なことであるけれども、尙立入つて考へると、其等の利益は何れも疑はしいもの、又は大に割引を要するものである。

三、日本語の性質から見た假名とローマ字

日本語の音が假名に適してローマ字に適しないといふことは、或程度までは認めてよい。人によつては、日本語にも母音の添はない父音があるやうに云ふけれども、私は現在日本語の正式な發音と認めるべき音は假名を拾つて讀むときのやうに母音の添つたものであると思ふ。従て父音だけの音を書く場合がないから、日本語ではローマ字が英語や獨逸語などに於ける程必要又は適當でないやうに見える。併し拗音やつまる音になると、假名には「石屋」「醫者」の類の混同があつて實用上こまるばかりではない。形の上から見ても、假名の書き方「しやしん」「きつて」などが間に合せであるのに引きかへて、ローマ字の書き方が全然調のつて居ると云はねばならない。勿論、假名の方でも、此等の場合に「や」「ゆ」「よ」「つ」に特別な標しをつけるとか、それを特に小さくするとかすれば、まぎれないだけのことは出来るに相違ない。

いけれども、それにしても矢張姑息の策たることを免れない。

音の性質から見ても、「しゃ」又は「しゃ」よりも *siya* の *i* が省かれた形 *siya* の方が實際の事情に當つて居ることは認めねばならない。即ち、孤立した父音はないとしても、直音と拗音促音との間の關係は矢張ローマ字で表はさなくては適切に表はせないのである。(尙三九一頁以下参照)。

又も一つ日本語が性質上ローマ字で書くべき語であることの證據となることは、動詞の語尾變化やいろいろな音便變化にある。動詞の語尾變化といへば日本語の性質の中の一つの小さい部分だとも云へるけれども、その小さい部分が最多く日本語の特徴を含んでゐる部分であるから、十分それに重きを置いて見なければならぬ。假名を使つて動詞の語尾の變化を現はさうとすると、五十音圖の各行について別々に假名を書き並べてそれを書き表はさなければならぬのに、ローマ字であれば、

同じ種類の變化が只一つの變化で表はされる。例へば「書く」「讀む」「押す」「立つ」「切る」などの動詞の變化は、假名で書けば、

書	か	か	い	き	く	け	こ
讀	ま	ま	い	み	む	め	も
押	さ	さ	い	し	す	せ	そ
立	た	た	い	ち	つ	て	と
切	ら	ら	い	り	る	れ	ろ

これだけを書いて示すことを要するのには、ローマ字なれば、

kakunai	yomanai	osunai	tatanai	kirunai
kaki	yomi	osi	tati	kiri
kaku	yomu	osu	tatu	kiru
kakeba	yomeba	oseba	tateba	kiireba
kakô	yomô	osô	tatô	kirô

この通りだから、變化は只一通りの變化

—anai
—i
—u
—eba
—ô

だと云へる。

一體これ等の動詞は文法で同じ種類の動詞で同様な變化をするのだと云ひながら、假名流だと「カ行ならばカキクケコ、サ行ならばサシスセソ、タ行ならばタチツテト、マ行なればマミムメモ」などと皆別々に書き表はすといふのは、書き方が不徹底だからである。第一或種類の動詞の例を出すのに五つも六つも列べなくてはならぬと云ふのが變な話である。ローマ字流でいへばどれもにも通用する規則として「語尾が—anai, —i, —u, —eba, —ôと變る」と云ふだけで足りる。例を出すにも前の父字が何といふことを顧る必要なく、どれでも只一つか二つ出せばわかる、それが

「同じ種類の動詞で、同様な變化をする」といふことの最も當然なやり方であることは云ふまでもない。(尙この點に就いては三九一頁を見られたら)。

又、音便の變化で云へば、「書けば」を「書きや」、「押せば」を「押しや」、「立てば」を「立ちや」、「汲めば」を「汲みや」、「切れば」を「切りや」と云ふ類はローマ字で書けば kakeba, oseba, tateba, kumeba, kireba などの「eba が ya に變る」といふ只一つの變化だといふことが判る。

これ等は、読み書きに直接關係する便不便の問題ではないけれども、ローマ字で表はされるやうな性質が日本語の正味の一部分になつて居ることの證據で、従て、ローマ字は日本語を書く字として性質上適當して居る字であることを示すものである。即ち「孤立した父音がないから日本語には假名が適して居る」といふのは、外に表はれた一面だけを見た論で、深く日本語の性質迄を調べると、日本語は全くローマ字式の語であることが知れるのである。

四、読み易さの問題——字の形から見た假名とローマ字

假名とローマ字の比較で一番大事な問題は、読み易さの問題である。

凡て、慣れれば読み易い、慣れないうちは読みにくいといふのは、當り前なことであるから、どちらが読み易いかといふ問題についての個人個人の判断には、文字其ものの性質から来る部分と、其人の慣れから来る部分と混つて居る。従つて人によつていろ／＼ちがつた意見を持つて居るといふ事は止むを得ない。それで吾々は、色々な事情、即ち文字の性質やそれに關する事實などから推し考へて、普通の場合に多くの人について云へると考へられるやうな判断を下すことが必要である。

ローマ字の性質。假名論者のうちには、「ローマ字が読み易いと云ふのは、外國語でその字を見なれて居る人達の云ふことであらう」と云ふ人があるけれども、これは事實と違つて居る。英語などになれて居る人が誰でも「ローマ字は読みにくい。

英語なれば一々綴つて見なくても語の形だけを見ても分つて行くが、ローマ字は一々綴つて讀まなければならぬから、読みにくい」と云ふ。何處でも聞くこの批評から次の事實が儘に認められる。

(一)一字を見慣れて居ても、ローマ字文は読み易いものではない。

(二)同じ字を使つて居る英語、フランス語、ドイツ語などでは、一々綴つて讀むことをしなくても文章が讀みとれる。

この二つの事實から考へると、(一)ローマ字は一つ一つの字を離して(例へばHitoとあるのを Hi-to、to-toとよやうに)讀むのには適して居ない。しかるにHitoといふローマ字書きの語に慣れて居ない人は勢、Hi-toと讀んで行かなくてはならないから讀みにくいのである。之に反して、(二)ローマ字は各語の全體を一つに纏めて讀むのに適して居る、即ちローマ字は、それを綴つて一つ一つの語にするとき、纏まつた認められ易い形をなす、(例へばHitoとある全體の形を一度に見て、

すぐヒトと判断するやうな読み方が出来る)といふ性質を持つて居るのである(それには無論慣れが必要であるが)。これが、ローマ字の最も優れた大事な性質である。この性質のある原因が何であるかと云へば、ローマ字の形から來て居ることは勿論で、中でも次の二つの事が主であるやうに思ふ。

(一) 主な線がきまつた向き——普通の字體では上下の向き——を持つて居ること。その間に混つて居る曲線や斜な線は、見分けの標しになりながら、全體としての向は十分よく保たれて居る。

このことは、字を續けた場合に、二つの字のなじみをよくするといふ結果を生ずる。實際擦り減つた活字で *n m i h u* などの續いたのを見ると、どこが字と字の界だか分りにくいやうな場合がある。それほどに字と字とがよくなじんで居る。これが、ローマ字が語に纏まつた形を與へる原因であらうと思ふ。

(二) 二字の主要部の縦幅が全體としてはきまつて居りながら、其間に上に出た線や下に出た線が混つて居て、各の語に持前の形を與へて居ること。日本語でも *k t h d* *b g p* や拗音に固有な *y* がよい程の数はいつて居るために、此點が却々よく行つて居る。これが言葉全體としての見分けがたやすい原因であらう。

假名はどうか。上のやうな二つの點について假名がどうであるかと見ると、どちらの性質も缺けて居る事がちぎりに知れる。假名の線には、全體を支配する主な向きがなく、假名を二つ並べたものが一つの形をなす様になじまない。例へば「ひと」「ヒト」「ロマ」などどれを見てもヒトと獨立して居る。又假名を幾つか並べて見ると幅も丈も一樣で變化がないために、一つ／＼の書いた語に持前の形がない。

此點から考へて、假名は、いくら慣れても、ローマ字文に慣れた場合のやうに読み易くなるだらうとは思はれない。——即ち一つ一つの假名を讀まずに言葉の形を見たいけで讀んで行くといふやうになることは出來ないと思はれる。

「かなのをきな」といふ方が著者に書面を寄せられた中に、實驗談を述べられて、

「細かな字で十ページ餘りもある文章を假名で書いたのとローマ字で書いたのとを讀んで見て、たしかに假名の方が讀み易いことを見た」と言はれたが、これはさもあるべきことである。十分に慣れないうちは、ローマ字文が假名文よりも讀みにくいといふことは、上に述べた性質の違いから考へても當り前な事で、そこに反つてローマ字の優れた點があるのである。

ローマ字は、いくつかが集つて一つの纏つたものを作るから、その中から字をとり出して讀むのは非常にわづらはしい。假名は字が一つづゝ離れて居るから、拾つて讀むのに讀み易い。拾ひ讀みに假名が讀み易く、ローマ字が讀みにくいのは、假名には言葉としての纏りがなく、ローマ字にはそれがある證據である。又假名は縦書にしても横書にしても讀み易さに左程の差なく讀めるに反して、縦書きにしたローマ字は非常に讀みにくいものであること、なども同じ性質上の差を示す事實である。従つて假名はいくら慣れても拾ひ讀みが早くなるだけのものであるし、ローマ字文は慣れれば字の拾ひ讀みをしないで言葉の形を見ただけで讀んで行く様になるものである。

猶残つて居る問題は、假名を改良したならば、上に書いたやうなローマ字の優れた點を假名に持たせることが出来はしまいかといふ點である。これは詳しく下に七の項で述べるが、結論だけをつまんで云へば、私の考へでは、假名の改良は實際上十分に成功する望みのない問題である。

五、外國、外國人、外國語に關すること

世界に於ける日本語及び日本人の發展といふ點から假名とローマ字の比較をすれば、ローマ字は世界的の字であるから、何處へ行つても印刷が出来る、電報が打てる、郵便の宛名の書き換への必要がないなどの便利はいふまでもないが、もつと大切な事は、日本語が外國人に學ばれ易く、又外國に廣く知られることである。無論、

字が同じでも言葉が違へば直ぐに了解される譯がないし、又假名でもそれを習はうとする外國人には別に六つかしい譯ではないけれども、字が同じであれば、初め正式に日本語を習はうと考へない人でも、切れくいな言葉や文句を覺へる機會が——殊に旅に來る外國人には——あるから、日本語が世界一般の人に親まれるし、又さういふ人の中からもつと正式に日本語を習ふ人も出る譯である。

この關係はロシア文字を見ても分る。ロシア文字は、ローマ字と違つて居るだけのために、例へば旅行のための會話の書物などには、それが書いてなくて、ローマ字でそれを寫したものが書いてある。日本語が若し假名で書くことによれば、その假名、従つて日本語はやはり世界に擴まりにくい譯である。

なほ他國民との感情、思想の疏通といふことも國家的に見て極めて大切なことであるが、それについては第四章の七で述べる。又ローマ字を使ふと外國語を使ひ易くなつて、結局外國語を獎勵する結果になる。

假名にはそれが無いと云ふ點を論ずる人もある。しかし、實際上さういふことはないので、この點については第五章の九で述べることを見られたい。

六、固有の字と世間並の字

日本人は領土内の異人種、朝鮮人、臺灣人等を導いて行くべき位置にあるのに、それが自分に固有な字を捨て、西洋の字を使ふとなると、導いて行かれる側が「やはり日本人は西洋人に劣るものだ」といふ感じ——信用の薄らぐ感じ——を持ちはしないかといふ疑を持つ人がある。

これは一應尤もなやうであるけれども、實は何でもない。例へばロシアの字を見てロシア人のえらさ加減を推しはかる場合を想像するに、ロシア人が今の字を續いて使つて居ればえらいと思ひ、ローマ字を使ふやうになつたらそれを輕ずるかといふに決してさういふ事はない。ロシア人が變つた字を使つて居るのに就て吾々が感

心するとすれば、それは開けない頑固さに對する一種の感心に過ぎない。吾々が假名を使つて居る場合、日本人が世間並外れの字を使つて威張つて居るといつて感心する朝鮮人や臺灣人又は他國人もあるかも知れないけれども、それよりは、日本がまだ世間並になつてゐないといふ點から起る不信用の方が強からうと思ふ。日本人の兵隊が假に筒袖、だん袋を着て居ると想像するに、西洋化して居ないといつて人が賞めるだらうか。今のやうに洋服を着て居るのを見て、「日本人は矢張り西洋人に叶はないのだ」といふだらうか。

日本人が領土内の各人種其他凡ての國民から信用を得ようとするには、開けた世界の世間並の字を使ふ事が必要である。

又、假名論者は日本語と日本人とのみを考へて、世界の現在の形勢を餘り軽く見て居る。假名論の最大研究者なる山下芳太郎氏は「我々が英佛の文字を見慣れて居つてロシアの文字を見ると非常に六かしさうに感ずるが如く、外國人がローマ字で

書いてある日本文を見ると親みを感じ、片假名で書いてある日本文を見ると異種族の人を見るやうな感じがするに違ひないが、蓋し之は止むを得ざる事と諦めねばなるまい。文字丈けをローマ字にしても顔附きが違ふから、會つて見たら矢張り我々は日本人で彼等よりは異種族と思はれるのである」と云つて居るが、我々の考ではこれは決して軽いことではない。

國際聯盟とか平和會議とか國家の運命が軍隊以外で大に動かされる時勢には、國民の思想や意見などが直接に互に知れるといふことの肝要さは、國民に取つて何よりも大事なことだといつても過言ではあるまい。

吾々は、外國人と同種族と思はれようとは思はない。只外國人多數の人が日本語に對して親しみを感ずる、日本で出る日本語の著書新聞雜誌を直接に讀んで、日本人の意見思想をよく了解するやうなることを希望するので、これは國民の將來の運命のかゝる大切な問題であると思ふ。そして、この點で運用が出来るだけよくなる

爲には、前節で述べた通り、日本語にローマ字を使ふことは絶對的に必要である(尙第四章の七を見られたい)。

假名論者がこの點を軽く見るのは、數十年前の世界の形勢なれば認めてもよからうが、今の世界では最早容れることの出来ないことである。

現在の世界では、吾々國民の命の一部である言葉には、日本語を尊重し發展させ、これを表はす道具に過ぎない字には、世界的な世間並なローマ字を使ふことにするのでなければ國民國家に取つて重大な不利益を醸すことを思はねばならない。

七、改良假名の問題

上に読み易さの問題の處で述べた假名の缺點を知つて、それを改良してローマ字のやうな優れた形を持たせようとしたのは故山下芳太郎氏と高尾謙一氏とである。兩氏ともにこの改良の根本方針として、字形の改良は、誰が見ても直に何の字かわ

ヨコガキ カガカ カツジ ハ

廣告ニ イレテ ヒトメ ヨ ヒキキスク、
プログラム メニュー ニ モチイテ キガ キイテ オリ、
メキシ カ80ガ ニ ツカッテ アラシエ ガ 了リ、
年賀狀 アツサ エマイ ナド ノ 印刷ニ ヨク ウツル。

ハツキ J シミ J フリカタ。

アツキ J キセ J エ ツイタ フキ ニワ、 キハツユ デ モミ J
タセハ フロマス、 シカシ、 ケオリセ J エ ツイタ フキ ニワ、 キハツユ
ラウシ ニ ツケテ、 ソロデ、 イクタビモ コスウテ アラエハ ウマク
デス。 ナオ キハツユ J シミガ、 ソロエ ! コリマシタ フキワ、 リ

上、山下芳太郎氏の假名。下、高尾謙一氏の假名。

かる程度でなければならぬとして居られる。これは假名の最大の強みである「誰でも知つて居る」といふ性質を失はない意味に於て、當然の用意である。そしてローマ字のやうに横に並べたときにその文字が互に密著して各語が一つの形をなし、ある見覺えある語形を作るやうに工夫を積まれた。二人の方が獨立に研究された結果は、略同じやうなもの(上の寫真版参照)である。

さて、このやうな改良によつてローマ字の長所を備へた假名の形が出来上つたと云へるかどうか、又それが十分でないとした

ときに、同じ方針で今後も工夫を積んだならば十分なものを作り出される望があるかどうか問題であるが、私はそれは望みのない仕事だと信ずるのである。

一體、ローマ字の種類が假名よりも少い(日本式で日本語を書くには十九字)ので、それがローマ字の一つのよい點であるが、その字數が少くてよいといふことは、兒童にそれを習はせる場合の手續の少いことを主とするのではない。假名四十八(又は濁りを入れて七十三)を習ふ手續は別に論ずる程のものではない。十九字(又は二十六字)と、假名四十八字(又は七十三字)との數の差の要用さは、寧ろよい字を、それだけ揃へることの、やさしさ、むづかしさにあるのである。澤山の字に別々の形を與へて、それが皆簡單で、見分け易くて、並べたときに馴染がよいといふ三拍子揃つたものになると云ふことは、其字の數が少し多くなれば非常にむづかしくなるだらうといふことは誰でも容易に合點されることである。ローマ字二十六字であればこそそれが出来る、四十七字ではむづかしいといふことは、やつて見なくても

左もありさうなことである。況んや、各の字の形が是迄の假名と大體同じでなければならぬとしたら、さういふことは無理な註文だと云ふ方が當つてゐる。山下氏と高尾氏とは、出来るだけそれをやつて見られたので、其努力には、吾々敬服して居るのである。又、兩氏の得られた成績についても、さういふ事情に於ける成績としては成功して居ると云ふを辭しないけれども、絶對的の意味に於ては、十分な成功を得られたとは云ひかねる。のみならず、將來同じ方針で字形改良が如何ほど研究されても、この點は變るまい。これは、註文が元來無理な註文なのだから。

八、第四種の假名論及び新字論

假名を一寸認めのかないまでに變形して横書きに工合のよいやうにしたのは小森徳之氏の案がある。これは三十年以上前からの案で、これの特に面白いのは餘程自由に變形した筆記體が出来て居ることであるが、それだけこの筆記體は讀みに

くいもので、一般に通りのわるいものである。

近年もつと自由に作つた假名式の新字が稻留正吉氏其他數氏によつて公にされたり、其外公になつて居ない新字の案は随分數多くあるやうである。

これ等のものは、字の形を覺えるのにも相當の時日と努力を要するので、餘り世人の注意を引いて居ないやうである。私の考では、かういふ案は、擴まり悪いばかりでなく、うまく出來上る望が少いし(前節參照)、たとひ出來ても五、六の節で述べた點から見て國字として望ましいものではない。

九、結論

假名は歴史上日本固有の字ではあるけれども、日本語の性質から調べると、假名よりもローマ字の方が適當して居る。その上、假名は字の形が持つて居る缺點が如何に研究を積んでも救はれる見込がないので、拾ひ讀みで間に合ふ程度の小さい書

き物ならば假名も相當に使へるであらうが、大部の本などを假名で書いて、讀者が早くそれを讀むといふやうな使ひ途には到底適しない。この點は國字として根本的に大事な點であるから、假名は國字としての資格を持つて居ない。ローマ字の方は、慣れないうちは假名よりも讀みにくい代りに、慣れれば字の拾ひ讀みをせずに、語づい讀んで行ける性質を持つて居るので、國字としては適當してゐる。

のみならず世界の**大勢**から見れば、ローマ字に比べて假名は全く**價値**がない。

假名が(一)日本人全體に知れて居るから直にも使へるといふこと、(二)同じ文句を書くのに字數が少くてすむといふ二つのことは當つて居るに相違ない。併し、ローマ字は國字として採用されないうちでも、世界的の文字として、又日本語の世界的書き方として(第二篇參照)近いうちに日本人全體に教へられるやうになることは疑ふ餘地がない。それ故、右の假名の長所(一)は、時日の立つうちには、左程の意味がなくなくなる。又、(二)も、字の性質のちがひを合せて考へれば、字數の差だけでは何と

も云へない問題である。いづれも國字としてローマ字を採ることをためらはせる程の重大さを持つて居ない。

要するに、假名は、當分のうちは、日本人全體に知れて居るといふ點から、小さい一般的な書きものなどには相當廣く使はれる事と思はれる。併し、ローマ字が、一方では文字として優れた性質から凡ての種類の書き物に使はれ得るし、一方ではその世界的の性質から日本でも次第に廣く知られるから、上のやうな假名の使ひ途も早晚ローマ字にかはるであらうと思はれる。

第四章 ローマ字を國字とすることの利益

一、教育の經濟

前に(第一章の二)述べたやうな漢字から生ずる日本國民の損は、ローマ字を國字とすることによつて完全に救はれることは明である。

吾々が研究して使つて居る方式によれば、ローマ字の讀み方も書き方も共に極めて簡単な手數で教へられ得るので、小學校中學校等の教科書が皆ローマ字で書かれるとなれば、各科目とも全く内容の學習にだけ力を向けられることになることは諸外國に於けると同じことである。現在教へられて居る位の教材なれば小學校の課程は四ヶ年位で済むだらうと云ふのが故澤柳博士などの稱へることであつて、日本全國みなこのやうになつたとしたら、金額にして一年二億圓位の節約になるだらうといふことである。

併し、ローマ字の與へる主な利益は金の節約ではない。もつと大事なことは人間の發達盛りの時期を學校生活から解放して實業なり勞働なりに従事させることにあつて、學問でいへば昔からの大發見大發明は多く二十臺の時に芽ざして居るといふ事

實に照して見ると、日本の教育制度、二十五六で漸く大學を卒業するといふ制度は、日本に於ける大發見大發明を半ば封じて居る制度であると云ふべきで、此邊に於ける二年又は三年の學校生活の短縮は日本の學問界に於て想像外の大きな發展を生ずるに相違ない。學問以外の方面でも同様であらうことは云ふまでもない。

尤も、このやうに改良された状態になつて始めて日本が他の開けた國々と同じ状態に達するので、決して外國以上に出るのではない。これを思つても現在の状態で吾々が如何に大きなハンデキャップを持たされて居るかといふことを知らなければならぬ。

二、日本語の正當な發達

日本語には私立と市立、健康と權衡といふやうに音が同じで意味の丸で異なる語が多い。漢字で書いてこそ區別が出来るが、ローマ字で書いては區別が付かないか

ら、意味が分らなくなるといふ批評はよく聞くことである。これは現在の處事實をこれに相違ない。併し、このやうな語をローマ字で書いて分らないといふことは、果してローマ字が悪いからであらうかと考へて見ると、もつと深い處に此やうな差支の起る原因があることを發見するのである。

私立と市立、健康と權衡の類の不判明なことは、ローマ字で書いたのを見る時に限らず、話しや演説でも常に吾々の經驗してこまつて居ることである。一體、日本語と云へば日本人の言語といふ意味であるから、話しや演説は日本語の本體だと云ふことに誰も異議はあるまい。其話しや演説には漢字もローマ字もない。このやうに、漢字ローマ字の區別と全く無關係な、日本語の本體とすべき處に、既に右に云ふ不判明と云ふ性質が存在して居るのである。然らば、右の不判明なことはローマ字の罪ではなくて、日本語其物の缺點であることは疑はれない。

然らば、どうしてこのやうな不完全な性質を日本語が持つやうになつたかと云へ

ば、漢字で書けば分るからである。即ち従であるべき字の爲に主であるべき語が制せられて、語として不完全なものが行はれるやうになつたものである。語を重く見るならば、私立と市立のやうに誤を起し易い語が行はれる筈がない。

かう考へると、ローマ字で書いた市立私立の紛らわしさの責任は、ローマ字になくて却て漢字にあること、漢字が日本語を賊つて居ることが分る。

併し、責任論はそれにして、さういふ語が實際あるのはどうするといふ懸念があるが、根本の處が右のやうに分りさへすれば、それに處する道は明である。

永久な生命を持つて居る日本國民は、一時の行懸りの爲に不完全なものを保存して居るべきではない、吾々はこのやうな不完全な語を淘汰して行かねばならない。併しその淘汰は今の通り漢字を使つて居ては到底出来ない、否漢字を使つて居れば此類が益々ふえるばかりである。此淘汰をするのに最も有效な方法はローマ字を使ふにある。即ちローマ字で書けば意味が不判明になる（即ち語の不完全な點が顯

はれて来る）から、その差支なくなるやうに言ひ方を改めて行くことが自然の勢で、これがやがて日本語の改良を意味するのである。言ひ換へれば、ローマ字を使ふことは日本語の健全な發達を促すものである。

實際この問題（國語の整理）は、吾々ローマ字仲間が「ことば直し」といふ名前で斷へず研究實行して居る問題で、今迄にも相當の成績を擧げて居るのである。

✓日本語の正當な發達といふことは、同音異義の語のみではない。前に（第一章の二）述べたこと、ハイル、ワカル、コナレルの類の語を書き度いときにも適當な漢字がない爲にそれを他の語に取り換へて書くといふ現在のやり方は、日本語の素直な表はし方であり得ないのは云ふまでもない。ローマ字で書けば、かういふ語を書くにも何の差支もないから、思ふ通りに自由に書ける。即ちローマ字を使ふことによつて、素直なよい日本語が制限を受けずに使はれる。これは吾々ローマ字仲間が

文章を書くときに最も氣持よく感ずることの一つであると同時に、日本語の正常な發達として相當重要な意味を持つて居る事柄である。

三、書き物及び印刷に關する便益

ローマ字は、教育を經濟的にすると同じ理由で、文字の實用を經濟にする。漢字其者が書くのに暇のかゝるもので、ローマ字の方が遙に手早いといふことは學校で講義を筆記する學生の經驗談である。のみならず、我々が日常漢字を使ふときに知つて居る筈の漢字の書き方を思ひ出せなくて、これを思ひ出すのに、いくら時間や手数をひだにするか知れない。

特に商賣上などでは、其方の實際家の談によると、ローマ字であればタイプライターと一人の技術者を使つて、同時に必要だけの寫しを作りつゝ、口授すると同じ程の早さで、いくらも往復の書付けを作ることが出来るが、漢字ではこれが出来ない。

い。漢字でこれをしよとすれば數名の書記を使つて而も敏捷には行かないと云ふことである。軍事上でも同じことで、今のやうに戦争が大仕掛になると各部局間の敏捷な通信が非常に大切なことであるのに、現在の漢字を書く仕組になつて居ては到底勝味がないと云はねばならない。

印刷の方では、漢字であれば、字の種類が多いから活字を非常に多く用意しなければ小さい印刷物でも組むことが出来ない。相當に大きな設備をして置いても、同じ漢字が多く出て来る印刷物を組まうとすると其字が足りなくなつて、新に活字を鑄造するまで印刷が進行出来ない。ローマ字であれば、字の種類が少いから、小さい室に備へるだけの活字で相當な印刷物を組むことが出来る上に、同じ語が澤山出て來ても、或活字が使ひ盡されるといふことは滅多にない。これは活字だけの比較であるが、それを組む手數に於ても漢字は廣い場所から集めて來ることが必要なのに、ローマ字なれば、一ヶ處に立つたまゝで仕事が出来る。

又、ローマ字であれば、ライノタイプなどいふ便利な器械があつて、漢字なれば數名の職工が長くかゝつて活字を集めてくる仕事所謂「文選」と、これを列べる「植字」の手續を、一時に、只ポッチを押すだけの手續であるから、印刷が人手が少なくて其上甚だ敏活に出来る。この藝當は漢字では夢にも見る事が出来ない。モノタイプといふ器械は、漢字にも出来て居るが、字數の關係から便利さの程度が大にちがふのは止むを得ない。

タイプライター、ライノタイプの類でもつと便利な器械は、此後も西洋でいくらでも出来るに相違ないが、日本で漢字を使つて居る間はいつも日本人は指をくはへて引込んで居ねばならない。こんな器械が一つ出来るごとに我々は他國人に比較して一段づい不利益な地位に押下げられるわけである。

四、印刷物の面積に關すること

同じ文句を印刷するのに、漢字交りとローマ字とで使はれる面積の關係はどうであるかは、大變面白い問題であるが、これは一寸考へるほど簡単な問題ではない。

なぜかなれば、これは、漢字交りなりローマ字なりにどういふ活字を使ふか、どういふ組み方にするかによつてどうにでもなる問題だからである。例へば漢字假名もローマ字も同じ五號活字なり五號活字で組んで、同じ行間のこめ物を挿んで組むとすれば、上に組んであるやうに、ローマ字の方が場所を多く取るにきまつて居る。併し同じ號數といふことが比較すべき正常な組み方だと云ふ理由は別にないから、何か正常な比較の方針を定めなければならぬ。

同じ文句を印刷するのに、漢字交りとローマ字
Onazi Mouku wo insatusuru no ni, Kan

同じ文句を同じく漢字交りで組むとして、大きな活字で粗く組むのと小さい活字で細かに組むのとちがふのは、読み易さのちがひである。それ故に、漢字交りとローマ字とを比較するにしても、読み易さの等し

いものを比較するのでなければ意味をなさない。それで、つまり問題は、読み易さの等しい漢字交りとローマ字との組み方はどれかといふことになる。

私は、読み易さの等しい印刷物の材料として次のやうな三四類を取つた。

- (一) 多く読まれる日本の新聞紙と英米邊の新聞紙の組み方。
- (二) 日本と西洋に於ける普通の小説類の組み方。
- (三) 日本の小説の縮刷本と西洋の小説の普及版。
- (四) 日本の文部省で規定してある中等學校で使ふ教科書の組み方に従ふ漢字交りと英文の組み方。

これ等の二つ一組づゝの印刷し方を取り、それによつて印刷してある假名交り文一頁なら一頁の面積と、同じ文句をローマ字文に直して、その假名交りの組み方と比較さるべき外國語の組み方と同じ組み方にした時にそのローマ字文が取るべき面積とを較べて見たのである。さうすると、

ローマ字文が取る面積は、同じ文句を同じ読み易さの漢字交りで印刷した面積に比較すると七割乃至八割の面積で足り、といふ著しい結果になるのである。

これは書籍の價、製紙原料の經濟、其他いろ／＼な點に關係して、ローマ字によつて得られる大きな利益を意味するものであることは云ふまでもない。

五、郵便電信商賣品に關すること

普通教育でローマ字を習つて居れば、それが世界の文明國に共通な字である御蔭として、これ等文明國のどこへでも郵便物の往復が自由である。勿論日本語のみを知つて居て、日本語を知らない他國人と勝手に手紙の往復が出来ると云ふのではないし、又或外國の地名などの正しい読み方が分ると云ふのでもないが、外國に行つて居る親類知人から、其宛名を書いてよこしてくれれば、その通りの綴りを書いて、

其親類知人に手紙を出すことが出来る。又電報でもローマ字であればそのまゝ（日本文のまゝ）外國へ出せる。これは今日のやうに西洋へ往復する人の多い場合、随分多數の日本人に起る要な問題で、而も今日の處、ローマ字も外國語も知らない大多數の日本人が直接不便を感じて居ることである。

商品にしても同じことで、外國から來た品物が日本にも澤山あるのであるが、それに書いてある文句や商標などの意味や読み方を正しく習ふといふことは簡單には出来ないにしても、書いてある字の認めが、つくだけで品物を取違へないだけの効能は確に得られる。又こちらで作る商品にしても同じことで、現在では、内地向きの品物と外國向きの品物と、名前や商標を別々にして居るが、日本でローマ字が國字になつて居れば、日本で賣る品物が其儘外國へ出されるわけで、凡てが簡單で便利で、且つ世界發展の可能性を備へて居ることになる。

六、日本語の世界的發展

これは第三章の五、假名との比較の處でも述べたことであるが、尙次のことも注意すべきである。

どんな國民でも、世界に重要な位置を占めるやうになれば、その國語が世界に知られるやうになり、又國語が世界各所に知られるやうになれば、その國民の發展が益、盛になるのは云ふまでもない。この點から見ると、日本語が外國人に學ばれ易いと否とが、吾々日本人の世界的發展のために大きな影響を生ずることは明である。

一體、日本語そのものは外國人にも容易に學ばれるのである。併し、現在の書き方、即ち漢字交り書き方まで學ばねば新聞雜誌その他一般の書き物が讀めないのだから、そこまで學ばうとなると、その困難は一通りや二通りではない。吾々日本人でさへ、上に述べた通りこの書き方の學習には手こずつて居るのであるから、他國

人にはその困難は殆ど越えられないものゝやうであることは察せられる。尤も、多數の外國人の中には、日本人同様、又は多數の日本人よりもよく漢字交り文を書きこなし読みこなせる人もあるけれども、さういふ例が少し位あつたところで、外國人一般に關する上の斷定に間違はない。現に日本に居る外國人で、話では日本語の分る人は決して少くないが、新聞雑誌の讀める人は極めて少いと思はれる。

若し日本語の日用文字がローマ字であつたら、話の日本語と書いた日本語とが同じものになるから、——勿論問題次第で日常の會話とは大にちがふ語も出て來るだらうけれども、とにかく言ふ語が分れば書いたものも分るには相違ない、——外國人が日本語を習つて習ひ甲斐がある、従つて今までは「話だけ分つても仕方がない」と云つて日本語を習はうとしなかつた人までも、それを習ふやうになることは明である。又日本に來ない外國人でも、日本語を習つて日本の出版物を讀むことが左程むづかしくないとすれば、それを習ふ人が出て來るに相違ない。勿論それには、日

本國民がそれだけの價值のあるものでなければならぬには相違ないが、現在の日本の世界に於ける地位から見て、そのやうになることは疑を容れない。

一體、今迄日本人は、外國人に對する場合、いつでも自國語を出すことを恥ぢるやうな態度を取つて來て居るのは滑稽なほどである。吾々が英國へ行けば誰でも英語を話し、フランスへ行けば誰でもフランス語を話す通りに、日本では外國人も皆日本語を使ふのが順當であるべきのに、日本では、日本語の話せる外國人が珍しくて、話せない外國人が——日本は英語國だといふ氣持で——普通になつて居る。國際會議などでもその通りで、日本人は英語なり佛語で喋舌るのが普通だと思つてゐるやうである。先年海軍制限に關するワシントン會議で加藤全權が日本語で意見を述べたと云つて大事件らしく騒ぎ立てたが、それさへ自分携帶の翻譯者を通じて意見を述べたのだから、その日本語は正式には認められて居ない形になつてゐる。かういふ場合には、當然會議に公けな翻譯者がゐて、凡ての外國語の演説を日本語譯

し、凡ての日本語の演説を外國語譯して會議を進ませるといふ形になるべきものである。このやうにして始めて、日本が會議に於て對等な取扱を受けることになるのである。

このやうに、現在のところ、福永海軍少佐の所謂「翻譯は、い、て、こ、つ、ち、持、ち、」の状態にあるのは、吾々日本人に取つて不利益でもあり不見識でもある次第であるが、これには無論それ相當の原因がある。第一には、日本が今迄世界で重要な地位を占めてゐなかつたために、外國では日本語を持出して相手にも相手にされず、日本に來る外國人は凡て御客様扱にすることになつてゐたことが主な原因であらう。第二には、今迄の日本は、何事も外國から教を受ける立場にゐたのと、外國語の教育が一般的になつて居る關係から、外國人を大事にする習慣や、日本人自身外國語の出來ないのを恥ぢるやうな氣持のあることなども手傳つてゐたことであらう。

原因はとにかくとして、かういふ片手落な状態は成るべく早く改めて、正當な状

態に持ち直すべきものである。併し、一方から見ると、これは今迄吾々が永い間捨て、置いた權利、外國人が慣例によつて既得の權利として居る權利の回收を意味するのであるから、なか／＼容易には希望通りになり難い問題だと思はれる。この點から見て、日本人が世間並以上に、否世間並と丸で比較の出來ないほど複雑な書き方を持つて居ることが、非常に大きな障害になるであらうことは、さういふ問題が評議されるのを待たなくても知れ切つたことである。日本語で書いたものが外國人に容易に學ばれ、實際日本語の読み書きをする外國人が世界に珍しくないほどになつてゐれば、上のやうな權利回收を持しても多少の見込が立つであらうと思はれる。さもなければ、「翻譯は凡てこつち持ち」といふ不面目な状態は永久吾々の身から離れないものと思はなければならぬ。

七、他の國民との思想感情の疏通

世界に於ける日本語といふ問題は、只上のやうな形式上の不面目や翻譯の手續引受に止まるものではない。國家國民にとつて更に實質上重大な問題を含んで居る。それは現在のやうに、書いた日本語が極めて少數の人を除いて、外國人に了解されない状態に於ては、日本に於ける新聞雜誌著書に表はれる政治經濟外交等に關係する意見は、凡て少數の翻譯者の手を経て間接に外國人に知られる。さういふことは、量に於ても質に於ても、日本人の意見が十分に外國人に通らないのは當然なことである。そして、このやうに、日本人の意嚮思想が正當に外國に知られないために、國家國民が無益な迷惑を蒙つて居ることは、蓋し想像出來ない程度だらうと思はれる。一寸考へて見ても自分の直接知り得る範圍内の事柄なれば、實質以上に氣に掛けるといふことがなくてすむに拘らず、自分が直接に知り得ない範圍には、どんなことがあるかといふ疑念を以て見るといふことは自然の勢である。若し、將來日本に於ける一般の新聞雜誌著書がローマ字で書かれ、そのまゝ明つ放しに世界中

に読み取られることになつたら、諸外國に對する日本の立場がどんなに工合よくなるか、豫想以上のものがあるであらうと思ふ。

最近のやうに、世界の國際的關係が密になつて、軍隊以外で國家の運命の定められる時勢には、國民の意嚮思想が直接に外國に知れることが極めて重要な意味を持つものであることを忘れてはならない。

又新聞雜誌書籍に限らず、看板のやうなものでも、私生活に於ける書類でも、丸で違ふ字、而も數限りなく色々變つた字、とてもわけの分り得ない謎のやうな字、さういふものを使つて居る人は、簡単なローマ字に慣れて居る外國人から見れば、親しみ難い別世界の人のやうな感じを持つのは蓋し自然の情であらうから、米國に於ける日本人排斥問題の如きも、彼地に於ける、日本人街の漢字假名の看板、假名交りの新聞などがどれだけの原因をなして居るか蓋し想像以上のものがあらうと思ふ。ローマ字であれば、外國人は假令其語は分らなくても、學べば學ばれ得る、手

近なものゝやうな感じがするから、さう云ふ字を使つて居る日本人團に對しても親しみ難い別世界の人のやうな感じはすまいと思ふ。即ち米國に居る具眼者の云ふやうに、日米間の難問題なども、ローマ字採用によつて豫想外に融和されるわけのものだらうと思ふ。

八、此章の要點

上に述べたことの要點を挙げれば

- (一) 日用文字としてローマ字を使ふことによつて、始めて第一章で述べたやうな漢字から來る損を救ひ、教育をもつと有効に且つ經濟的にして、吾々が世界に於ける烈しい競争に加つて行くことが出来る。
- (二) ローマ字を日用文字にすれば、日本語の正當健全な發達を期することが出来る。

(三) ローマ字を使ふことは日本語の世界的發展を助け、其外一般生活に、軍事に、商業に、印刷に、外交に、直接間接に要する利益を與へる。

第五章 ローマ字採用に關する懸念及び批難

一、讀みにくいといふこと

ローマ字で書いてある文章は、漢字交りて書いてある文章のやうに一目見て要點が見えると云ふことがない、一字づゝ拾ひ讀みをしなければならなくて甚だ迂遠だといふことは、誰でも云ふ批難である。これは事實それに相違ないけれども、この差は果して漢字とローマ字とに離るべからざる性質上の相違であるかといふに、決してさうではない。慣れないうちは讀みにくいのはローマ字の持ち前であることは、

上に(第三章の四)述べた通りで、見慣れさへすれば、一つ一つの語が固有の形をなして一目讀みが出来る點に於て、ローマ字は漢字と同じ特長を(讀み方が不確だといふ缺點を伴ふことなしに)持つて居るものだといふべきである。それ故、右の差は全く漢字交り文は長い間慣れて居るから認め易い、ローマ字文は慣れて居ないから認めにくいのであるに相違ない。これは實際外國語の場合を見てもよく分る。英佛等の人はローマ字を使つて少しも差支なく讀み書きをして、しかも世界の文明の先頭に立つて進んで居るではないか。一方漢字を用ひて居る支那の方は却て文明が進んで居ないではないか。要するに、批難は全く慣れないと云ふことのみから來て居るので、ローマ字其物の缺點によるものではない。否ローマ字の優れた性質として、慣れて來ればローマ字の方が(讀めないことがないだけに)漢字交り文よりも讀み易くなるにきまつて居るのである。

二、同音異義の語が分らないといふこと

ローマ字では科學と化學、健康と權衡といふやうな同音異義の語の區別がわからないから不都合だといふことも多く聞く批難であるが、この點についての批判は第四章の二、「日本語の正常な發達」と云ふ處で十分に述べた。そこで述べた通り、國語そのものについて居るこの缺點はローマ字文を使ふことによつて始めて救はれるのである。

三、漢語系統の語の教へにくいこと

ローマ字文に對する批難として尙云はれることは、「日本語にはどうせ漢語が多く使はれるに相違ない。漢字で書いてあれば、其漢語の意味がぢきに分るが、ローマ字では分りにくい。特に兒童にこれ等の漢語を教へるときに、漢字で書いてあれば、

其漢語を組立て、居る各の漢字を教へれば、其漢語は特に教へずとも分る場合が多いから、比較的少數の漢字を教へて、多數の漢語を知ることが出来るが、ローマ字ではそれが出来ない。その結果、ローマ字で書いた日本語は、語を學ぶ困難が却て漢字の場合よりも増しはしないか」と云ふ點である。

この論は漢語のみに關するものであるから、日本語が大部分漢語で出來て居るのでない以上、要な問題ではない。

併し、それにしても、一體よい日本語として許すべき漢語はどんなものかと云ふこと、及びそれ等の漢語について上のやうな問題はどうかは考へて置く價值がある。漢字を使ふ流儀で行くと、目で見れば分ると云ふ點から、俄作りの漢語が相應に自由に使はれる。二つの意味を結び合せた事を表はすのに、其意味を持つた漢字を合せて、一つの漢語にして例へば高山、峻坂、急使、遷都、疾走などのやうに書く。これ等は何れも實際二つづいの意味を表はさうと云ふのだから、一つの語

に作るのが無理で、當然高い山、峻しい坂など、二つづいの別々の語で表すべきものである。尤も、組立語を全く廢することが必要なのではない。日本語の組立語ならば分り易いが、漢語の組立語が分りにくいのである。

驟雨（にわかあめ） はよいが、しゅーう はよくない）

投下（なげおとす） はよいが、とーか はよくない）

改稱（名のつけかへ） はよいが、かいしよー はよくない）

又簡単な日本語と同等な漢語がある、これなどは無論止めるべきものである。

廢止するよりはやめる、歩行するよりはあるく、決定よりはとりきめ。

尤も、必ずしも漢語を廢するには當らないが、要は日本語として出來上つて居る語を其儘にして組立詞なり、關係詞で繋がる句なりにするがよいのである。

氣溫よりは空氣の溫度、軍縮よりは軍備縮小、密偵よりは秘密偵察

などのやうに、出來上つた漢語、空氣、溫度、軍備、秘密等の語は其儘（頭や足を

切離さず) 組立てるべきである。

一體、臨時に作つた漢語は、口で云ふのを聞いて居ては推測を加へなければ分らない(演説を聞いて居て、時々漢語を考へて居るうちに、演説が先へ行てしまふことは實際始終經驗することである)、字で書いて漸く分ると云ふ點で、ことばと云ふよりは符牒の性質を帯びて居る。さう云ふ漢語は止めて正常な聞いて分ることばに改めるべきものである。

かう云ふ點で相當な取捨を加へれば、漢語の數が著しく少くなり、且つよく馴染んだ語のみになる。そして口で云ふのを聞いてよくわかることを標準とするから、ローマ字文で分りにくいと云ふことは決してない。

又ちやんと出來上つた立派なことばでも、漢字が見えないと、意味がぼんやりするやうな感じを抱く人もあるらしいが、それは習慣から來た一時の感覺到過ぎない。否、我々は通常使ひ慣れて居る意味の明瞭な漢語を書かうとするとき、時々字を忘

れて一寸思ひ出せないことがある。これ等は確に、ことばとしての漢語は漢語の形を俟たず、そのひびきだけで用を足して居るものと云ふことの證據であつて、漢字を見ねば物足りないといふのは一時の迷に過ぎないことを示して居る。

次に兒童に漢語を教へるについては、如何にも組立て、居る漢字一つづつを教へれば、漢語が數多くわかると云ふことになるが、是迄のこのやうな教へ方は果して日本語を教へるといふ目的を達して居るだらうか、先づ問題である。さう云ふ組合せは、形の上の組合せだから符牒の性質を持つて居るので、假令その意味は分つても、それはことばの知識としては正常なものと云へない。その證據と見るべきことは、主に字の形に注意する結果、音に對する注意が粗末になつて、漢字の「讀み方」が亂暴になることである。比較をヒコー、天文をテンブンなどのやうな例は數限りないことは人の知つて居る通り。矛盾をホコトンなどは極端な例であるけれども、ムジユンと讀むことは決してやさしい讀み方ではない、且つ此例などは意味

さへも矛盾と盾とからは分らない。多くの人は漢字の形を主として、ことばといふことを次に考へて居るから、平氣で居る「漢語の読み方がどう」と云ふのが、既に形を主とし、音を從にして惟まなうことを表して居る言ひ方であるから、これが左程の物議を醸さないが、日本語と云ふ立場から考へて見ると、漢字は語源の性質を持つだけで、語そのものではない、矛盾ならムジエンといふ音が日本語に使はれることばであるから、この方を大切にせねばならない。要するに、一箇一箇の漢字を教へて、組立てた漢語を推し知らせると云ふ趣向は、日本語の教へ方として不正當なものならず、主要であるべき語其物に注意させないで、誤を起し易く、且つ誤つても平氣で居るといふ結果を來すのである。況や熟字の推讀は只其讀み方の誤りを生じ易いのみでなく、肝心な意味もとんだ誤解をして居ることが決して珍しくないから、一字づいの漢字の知識から組立てた漢語を推し考へさせることは甚危険なり方で決して國語の正當な教へ方ではない。

これは、どうしても、組立てた漢語全體のひびきの方を主にして、一語づゝ教へることが必要である。而もそれを教へるのに、昔の漢文の講釋で吾々が習つたやうに、漢語を解剖して語原的の説明をすることを主にせず、日本に於て實地に其語を使つて居る意味と使ひ處とを主として教へるべきである。

このやうにすれば、かう云ふ種類の漢語一つ一つについて云へば、今迄の教へ方で慣れたのに較べて、或は教へ方に餘計手數がかゝると思はれるかも知れない。併し、前に云つたやうな方針によつて、このやうな漢語は、(一)數が割に少い、(二)十分なじんだ語だけだから、毎日の生活でも聞くことが多くて、自然に練習を積む(ローマ字流で行けば、語が主であるから、日常生活で漢語を聞き知れば、最早其上の世話はない、例へばアイマイならば *aimai* で、書くには何の困難もないから。漢字の方では日常生活で聞いて使ひ途や意味のよく分つて居る語でも、それだけでは、例へばアイマイならアイマイの漢字を正しく書くことが出來ない)、(三)新に兒童に教へる

については、同じ漢字で出来て居る語を纏めて教へることも出来る（例へば *Suidō* を教へるときは、*Sui* はミヅと云ふことの漢語だとして、*Suibun*, *Suisan*, *Suirai*, *Suisei* などを説明することが出来る）ことを考へれば、國語教育全體に於て手数が左程餘分にかゝるとは考へられない。況や右の水の例でも分るが、漢字の方では水道、水分、水雷、水兵はスイーと讀むが、水飴、水垢、水入、水先、水掛論ではスイーと讀んではいけない、水草、水薬、水車 はスイーともミヅーとも云つてよいと云ふ區別をどうして教へるだらう。これ等は、どうしても一つ一つの語について區別して覚えさせねばなるまい（特別に教へなくても、水飴はミヅアメでスイーといはないことは自然に知つて居ると云ふ人もあるかも知れないが、若し自然に知つて居るとすれば、ローマ字流なら其上何も教へなくてよいことになる）。それには、同じ水の字を見て學ぶ爲に却て紛はしくて、兒童が餘計に苦しむわけである。ローマ字で行くならば、*Sui*——なり *Mizu*——なり各語が形に於て全く違つて

居るから、紛れることが丸でない。この比較論は水に限らず、殆ど凡ての漢字に就てあるから、こゝまで考へて比較すれば、つまり漢字を使ふ國語教育は甚だ複雑で、ローマ字の方が遙に簡單であると云はねばならない。

要するに、漢字を使ふ爲に漢語の教育に手数が省けると思ふのは、目的を正當に達する處まで考へないからである。國語の教育を正當な處まで進めるとして考へれば、ローマ字の方が遙に手数が省けて、而も有効に成績を擧げることになる。これによつて、始めて、*ホトト*や*ボクキョ*のやうな意外な語を教育ある人から聞くといふ奇怪な現象が避けられるのである。

四、古典的文學の連絡の斷たれる懸念

漢字を止めてローマ字を使ふことにすれば、日本の昔からの書物が讀めなくなつて、歴史や文學の連絡が斷たれるだらうといふ懸念を持つ人がある。さういふ心配

が全くいらぬといふことは第一章の五で十分に述べたから、そこを見られたい。

五、思想徳義心の養成に關する懸念

今迄の日本人の國民的思想や徳義心は漢字によつて養成されて來た。それがローマ字の世の中になつたら、どうなるかといふ懸念をする人がある。これも、全く心配する必要のないことだといふことは第一章の三で十分に述べたから、そこを見られたい。

六、文章が冗長になるといふ批難

漢字を使へば文章が簡潔に表はされるのに、ローマ字では冗長になるのは國文として損失であり、且つ漢字で表はして來た、崇高嚴正な感じを簡潔に表すことは、ローマ字では出來ないといふことを云ふ人がある。

この問題について、特に漢文口調の文章が日本語に對してどんな立場にあるものか等については第一章の四で十分に述べたから、そこを見られたい。

ローマ字文が冗長だと思ふのは、漢文口調の文章に慣れて居る人の云ふことであるが、それ等の人の推奨する漢文口調の文章の簡潔さは、日本語の文章としては簡潔過ぎると云ふ方が當つて居る(二二頁参照)。元來日本語は吾々普通に口で云つて耳で聞いて居る語であるのだから、正當な日本語の文章は矢張りさういふものであるのが當然である(勿論、直接の談話と書いたものとで幾分の云ひ表はし振りの差はあつてよいことであるが)。さうしてさういふ文章はそのままローマ字で書けるのだからローマ字文の方が寧ろ正當な日本文だと云はねばならない。

尤もこゝにいふのは簡潔過ぎて分らない漢文口調が宜しくないと云ふだけで、日本語の文章は冗長であるのが當然だといふ意味ではない。口で云つて分るやうな、従つてローマ字で書いてわかるやうな文章の中でも、簡潔なもの、冗長なものいろ

くあるわけで、それ等を、目的と場合に應じていろく研究して書くのが本當の日本語文章の發達を意味するのである。

七、印刷物の面積に關すること

多くの人はローマ字で書くとい印刷物の頁數が増して厄介なものになると思ふやうであるが、事實は全くその反對で、ローマ字の方が遙かに頁數が少くてすむのであることは第四章の四で述べた通りである。

八、支那と文字の同じことから得る利益を失ふといふ懸念

或人は「吾々が漢字を使つて居ることから、支那に於て又は支那の物事に對して日本が特殊の利益を得て居る、支那語を知らなくても、支那へ行つて筆談で意が通ずる、向ふの書き物が分る、又支那の新熟字が日本のに倣つてやつて居る杯の事情

からも知れる通り日本が支那を開發して行く使命を果すに都合がよい、ローマ字を國字にすることはそれを捨てるので大きな損だ」と云ふ。

これは輕重と主客とを共に顛倒した論である。支那へ行く人は日本人全體に比して極少數であるは云ふまでもない。それ等の人の利益の爲に日本人全體が非常な損をして居てもよいとは輕重を知らない論である。その上、その少數者の利益といふのも、普通「同文」といふ名で人の思ふほどのものではないと思はれる。日本の漢字や熟語と現今の支那の漢字や熟語とは違ふのが甚だ多くて、慮らざる失策が多いことは常に聞く處であるから、なまじ漢學が出来るなどと思つて、それを頼みにして行くと却て生兵法のそしりを免れない。支那へ行かうと云ふ程の人は日本に於ける漢學よりは今の支那語を習ふがよい。勿論それにしても漢字の知識があると便利であるに相違ないが、それには漢學としての深い知識が左程有效であるわけではない。日本で日用文字をローマ字にした處で、漢字研究者は中學生初め種々の程度に於て

澤山あるのだから、それ等の人が漢字の知識から支那語を學ぶに便利を得ることに左程大なる差はあるらしくない。

又同文の關係で支那を開發することを考へて日本の國字改良を控へて居るなどは、主客を顛倒したことである。日本が世界の競争場裡で人に追付けないほどの重荷を負うて居るのに、尙他の人の手を引いてやらうといふのは博愛主義には叶つて居るかも知れない、又手を引かれる人に對しては、こちらに利益ある關係にもなるであらう、併し如何せん、世界の競争には遂に落伍するを免れない。

一體、支那其物が漢字の爲めに教育の普及し難いのに苦しんで居ると云ふことである。日本は先づ自ら世界の競争に堪へるだけの輕裝になり、支那にもこれを範として輕裝させる方がいくら支那開發の使命に適するか知れない。

兎に角、自己の不健康を棚に上げて置いて他人の世話を焼いたり、自分の不健康を種に使つて他人の畠から出る利益を目懸けるなどいふことは永遠の策としてよいといふ理窟のありやうはない。

九、ローマ字使用は外國語の濫用獎勵になるか

ローマ字を批評する人の中には、「ローマ字を使ふことは外國語の濫用又は獎勵になりはしないか」と心配する人がある。實際ローマ字論者の中には、ローマ字の一つのよい點として、外國語を自由に混ぜて使へることを考へて居る人もあるやうであるが、私は——學問上の専門的言葉は別として、普通の書き物では——何處までも日本語本位がよくて、外國語を勝手に混ぜて使ふのはよくないと考へる。一體、現在の漢字交り文でも、外國語を使ひたがる人は盛に外國語を使つて居るし、我々の様にローマ字を使つても外國語を多く使はない人もある。この問題は將來も人によつて色々になり、又色々に議論されることであらうけれども、それはローマ字を使ふために特別に起る問題ではなくて、假名を使つても漢字交りを使つても矢張り

起る問題である。即ちそれは言葉の問題で字の問題ではない、従つてローマ字を使ふためにそれが一般的に影響を受けるだらうと思はれない。

吾々の經驗で見ると、一般向きの書き物では、外國語は、假名を使ふ場合よりもローマ字を使ふ場合に却て使ひにくいのである。その理由は、例へばよく使はれるオーソリチーといふ言葉にしても、假名なれば此通りで通ずるけれども、ローマ字で英語風に Authority と書つては一般の人に分らず、又 Osoriri と書くとも英語の方から其言葉を知つて居る人に却て通りが悪い。かういふ實際上の點から見ても、外國語は、假名を使ふ場合に較べてローマ字文に却てはいりにくい。一般の人に讀め兼ねる外國語を、物知りぶつて書きたがる人などは、ローマ字なれば餘計書き易いと思つて、餘計自由にそれを使ふかも知れないけれども、讀者に意味の通ずることを考へて書く人は、上のやうに、却て外國語を書くことが少いといふ傾向になる。従て、外國語濫用はローマ字によつて獎勵されるよりも、却て止められる方が多い

とも云へるので、全體としては、此點では何れにしても影響が少いと見るのが當つて居よう。

漢字對漢語の關係とローマ字對西洋語の關係の差。尙こゝで、漢字を使つて居る爲に漢語の多くはいつて來たと同様に、ローマ字を使ふと外國語が多くはいるだらうと思つて居る人があるらしいから、其點を辨じて置きたい。

漢字對漢語の關係と、ローマ字對西洋語の關係とは全く違ふ。漢字は、字であると同時に意味のある支那の語である。ローマ字は、音のしるしだけで、意味のある字でもなく、英國とか獨逸とかフランスとか云ふ或特別な國の語では尙更ない。漢字を使へば、その意味が主だから、その本家なる支那に於ける意味、従て支那の語が要する關係を持つて來るのは當然なことである。併し、ローマ字の方は何國でどういふ意味を持つて居るといふことに關係なく、只日本語の音を寫す標しに使ふのだから、日本語の外に何國の語も關係は丸でない。それ故、漢字の場合とロー

マ字の場合とは、外國語の干渉が來るといふ點で全く違つて居る。漢字の例からロ
ーマ字を恐れるといふことは丸で謂れないことである。

第六章 ローマ字の綴り方問題

一、綴り方の詮義の必要

ローマ字の読み書きに當つて、第一に問題になるのは綴り方である。

ローマ字論者の中には、ローマ字でさへあれば綴り方はどうでもよいと云ふ人もあるけれども、さういふものではない。一體何事によらず、本氣になつてやらうといふことに、どうでもよいといふことはあり得ないことで、どうでもよいといふ人は、それを本氣に考へるところまでまだ行つてゐない人だと云つても大きな間違は

あるまい。

特にローマ字綴り方問題では、最もよい綴り方を調べてかゝらねばならない理由が二つある。

第一 ローマ字が一般に行はれるところまで漕ぎつけることは容易な仕事ではない。さういふ大きな仕事は、出来るだけよい方法を選んでかゝらなければ、不成功に終るか、不成功に終らないまでも、勞多くして成績が悪いことは見易い道理である。現に私の知つて居る範圍でも、前々からローマ字に心を寄せて居たが、中學校邊で教へられる英語風な綴り方では十分得心が行かないので躊躇して居たといふ人が少くない。かういふ人は深く考へる眞面目な人達だから、ローマ字發展の爲に逃がしてはならない人達であるのに、ローマ字の方式がよくないと、さういふ人は動かないのである。

第二 語の書き方といふやうな社會一般の人を相手の仕事は、一旦或式が擴まつ

てしまふと、その後にもつとよい式にそれを改めようとしても、なか／＼改まらないものである。日本に於ける假名遣ひの問題、英國米國に於ける英語の綴り方改善の運動などは皆その生きた實例である。かういふことは、成るべく早くよく研究して最もよいものにして進まなければならぬ。吾々のローマ字運動の初期に於てすら、英語方面で行はれて來て居る綴り方が幾分「既に擴まつた綴り方」といふ權利を振廻す傾向があるために吾々は十分惱まされて居る。綴り方はどうしても今のうちに十分調べていかねばならない問題である。

二、日本式綴り方

吾々が、多年研究の結果、日本語に一番適當してゐる綴り方として使つて居る綴り方は、次の表のやうなものである。これは日本語に固有な性質を基にして定めた綴り方である點から、「日本式綴り方」と呼ばれてゐる。

ローマ字の日本式綴り方

	ア イ ウ エ オ					拗音			
	a	i	u	e	o	-ya	-yu	-yo	-wa
k	カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ	クワ
	ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo	kwa
g	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギユ	ギョ	グワ
	ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo	gwa
s	サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	シヨ	—
	sa	si	su	se	so	sha	shu	sho	—
z	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ	—
	za	zi	zu	ze	zo	zja	zyu	zyo	—
t	タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チヨ	—
	ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo	—
d	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂャ	ヂュ	ヂョ	—
	da	di	du	de	do	dya	dyu	dyo	—
n	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニャ	ニュ	ニョ	—
	na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo	—
h	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒャ	ヒュ	ヒョ	—
	ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo	—
p	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピャ	ピュ	ピョ	—
	pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo	—
b	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ	—
	ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo	—
m	マ	ミ	ム	メ	モ	ミャ	ミュ	ミョ	—
	ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo	—
y	ヤ	(イ)	ユ	(エ)	ヨ	—	—	—	—
	ya	(i)	yu	(e)	yo	—	—	—	—
r	ラ	リ	ル	レ	ロ	リャ	リュ	リョ	—
	ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo	—
w	ワ	ウ	ヰ	ヱ	ヱ	—	—	—	—
	wa	wi	(u)	we	wo	—	—	—	—

はねる音には凡てnを使ふ。例 Anma, Kanban.
つまる音には次に來る kstp を二つ重ねて書く。例 Sekkei, Ressya, Ittyōme, sappari.
引く音には aiueo に[^]を付け、又は(特に大文字の時)母字を二つ重ねて書く。例 Kōbe, Oosaka, Tōkyō, TOOKYOO.

この綴り方の特徴は、

- (一)五十音圖の各行に一定の父字を使ふ。
- (二)キャシャ等の拗音を凡て同じ規則に従つて書く

この二つである。但しヤ行のイエとワ行のウとは、假名でもア行のイエウと區別なしに書くから、*yi yo wu* の綴りを使はない(一三二頁参照)。

この綴り方が始めて明にこの形に纏まつて出たのは明治十八年田中館博士が「ローマ字意見及び發音考」として發表されたものに於てである。「但しそのときの表は *yi yo wu* を認めることになつて居た點だけ上のものところがよ」。

英語の方面で普通に使はれて居る綴り方(吾々がヘボン式と稱へて居るもの)には、上の日本式に較べて次のやうな違ひがある。

日本式	シ	ジ	チ	ヂ	ツ	フ	エ	シヤ	シユ	シヨ	ジヤ	ジュ	ジョ	チャ	チュ	チヨ	ヂヤ	ヂユ	ヂヨ
si	zi	ti	di	tu	du	hu	e	sha	shu	sho	ja	ju	jo	cha	chu	cho	ja	ju	jo

吾々が、日本語のローマ字書き方として、ヘボン式を斥けて日本式を取る理由は、ヘボン式は英語を主にして日本語の音を寫した形、又は英米の人が聞いて書いた日

本人の音の書き方といふ意味でこそ理窟に適へ、日本人が日本語を書く書き方としては、理窟に合はないものだからである。

このやうに云ふ理由は次の節以下で十分に述べる。

三、實際上の利害

理窟の上から日本式が優れて居ることは次の節で述べるとして、先づ實際上の利害について述べる。

(一) 宣傳の上から。外國人外國語關係の方面で發達して來たヘボン式を其儘使ふことは、吾々の重大な趣意を日本人全體に感ぜしめるに不適當である。日本式を持ち出せば、そこに或新しい趣意のあることが具體的に現はれて居り、努力が見えるから、人の注意奮發を促す效能が頗る大きい。實際ローマ字を使つて居る人の中に「日本式でやるからこそ此仕事面白い、やり甲斐がある、ヘボン式でやるのでは

一向つまらない」といふ人が少くない（それには次の節で述べる理由があるので）。特にローマ字論が社會に勢力を得るのには、國學者を無視することが出来ない。理窟から云つても實地から云つても、吾々の仕事はそれ等の人の十分な了解同情を得て進むべき筈の仕事である。然るに外國人外國語に寄生して育つた、性質上日本語に適しないローマ字は、此等の人の了解同情を得るには甚だ不適當である。半外國語の勢力の下にあるヘボン式を使ふことは、これ等の人にローマ字反對の材料を貸すことになる。

(二) 教へ方の上から。日本式綴り方は五十音圖に對して規則正しいから、外國語や音聲學を知らない小學校生徒や一般の日本人に極めて容易に合點される。一方ヘボン式は、大體五十音圖に従つて居て、而も shi, chi, tsu, fu 等不規則なものがある爲めに初學者には甚だ困難である。特に拗音は、日本式なら凡て一定の規則で行く爲に一度に全部を覺えるに引きかへて、ヘボン式では、キヤキキは kya kyu kyo

だが、シャシシシは sha shu sho, チャチュチュは cha chu cho, シヤシヤシは只二字の ja ju jo であるなど、初學者には中々合點され難い。又「丁稚」「一丁目」を Detchi, Itchōme とするなども覺えにくく、方の最も著しい例である。

ヘボン式の主張者は、中學校邊で外國語を學ぶ傍らローマ字綴りを知つて居る人が多くあるから、それを其儘使ふがよいと考へるやうだが、併しこれ等の人に對しては、綴り方の少しばかりの差異は一向問題にならない。簡単な、而も日本語の性質上自然的な日本式は、一回の話、一枚の説明書で、直に此等の人に了解される。其上、(感情の行違などからヘボン式を固執する人は別として)、普通の人は、(一)の處で述べたやうなわけで、却て日本式の異なる所が導火になつて、大にローマ字國字論に肩を入れるやうになる。そして其等の人が知己の兒童などにローマ字を教へるといふ場合に就て見ても、複雑なヘボン式よりは簡単な日本式で教へる方が擴まり方が早いにかまつて居る。

(三) 實地の読み書きの上から。又、實地の読み書きについて比較するに、日本語には直音のシチツなどは甚だ多く使はれる音であるのに、ヘボン式でそれ等に限つて他の直音よりも一字づつ多くの字を読み書きするのは甚だ煩はしい。これは、少しでも日本式を使つて見た人の誰れも實際に感ずることである。尤も、ジャジュジョヂャヂュヂョについては、日本式は各三字を要しヘボン式は二字ですむけれども、是等は日本語で出て來ることが少くもあり、また是等の音がシャジュシヨチュヂョと同じ資格の音である點から、日本式で是等と同様に三字づつで書くのが吾々の心持から云つても寧ろ自然で、それが煩はしいといふ感じを生じない。現に看板や廣告などにジャジュシヨヂャヂュヂョなどと書つてあるのが珍らしくないのはこの自然の心持を證明して居る。

田中館博士が明治十八年頃に數多の普通の文章(新聞紙などから取つた實地の例)に就いて取られた統計によると、同じ文章をヘボン式で書くのと日本式で書くのとでは、字數が百分の三位違ふと云ふことである。即ち、ヘボン式で書いて百頁の書物は日本式では九十七頁で済むわけになるので、これは、日本全國にローマ字を使う場合には、洋紙や色々な手間に莫大な差を生ずる譯である。

以上の説明で、現在ヘボン式が中學生以上に知られて居ることを考に入れても、凡ての點で日本式の方がローマ字擴めの爲めに有利であることが知れる。而も其有利なくつかの點は何れも極めて重大な意味のものである。——この問題に注意する人の氣受の點も、教へ方の難易の點も、實地の読み書きの點も。

四、日本式綴り方が日本語の性質に合つて居る證據

日本式綴り方が日本語の性質に適して居ることの證據となる最もよい實例は、動詞の變化と音便の變化である。

上に(第三章の三)假名とローマ字との比較の處で見た通り、

(一) 現在の日本語の文法で同種類の動詞と見られて居る五段活用(文語では四段)の動詞書く、汲^〇ひ、押^〇す、立^〇つ等の變化は、

日本式なれば

kak	—u, —anai, —i, —e, —o
kum	—u, —anai, —i, —e, —o
os	—u, —anai, —i, —e, —o
tat	—u, —anai, —i, —e, —o

のやうに只一つの變化 —u, —anai, —i, —e, —o で統へられるが、

へボン式なれば

kak	—u, —anai, —i, —e, —o
kum	—u, —anai, —i, —e, —o
os	—u, —anai, —i, —e, —o
ta	—tsu, —tanai, —chi, —te, —to

このやうになつて四つの動詞が同じ規則に従ふといふことが出来ない。

(二) 文語で中二段の動詞落^〇ちる、朽^〇ちる等の文語變化や口語變化を、同種類の起^〇る、下^〇りる等のそれと較べて見るに、日本式で書くと

otu,	otizu,	okureba ;	otiru 等
kutu,	kutizu,	kutureba ;	kutiru 等
oku,	okizu,	okureba ;	okiru 等
oru,	orizu,	orureba ;	oriru 等
otsu,	ochizu,	otsureba ;	ochiru 等
oku,	okizu,	okureba ;	okiru 等

この通り變化が同じ形になる。これをへボン式にすると、

のやうになつて、これ等の動詞が變化し方に於て同種類の動詞であることが形に表はれなくなる。

(三) 自動詞と他動詞の関係でも、タ行と他の行と五十音圖に従つて同様に於て居

る。日本式で書くと、

otiru (落) と otosu

hiru (干) と hosu

など、又

tatu (立) と tateru

aku (明) と akeru

komu (込) と komeru

など、皆平行に行く。へボン式にして ochiru, tatsu などとしては同じ形には行かなくなる。

(四) 音便の例を見るに、例へば

日本式なれば	Tama	tikai	Ture	Tyawan
	Akadama	tedikai	Mitidure	Kakedyawan

へボン式なれば	Tama	chikai	tsure	chawan
	Akadama	tejikai	michizure	akejawan

日本式では *た* が *た* になると云ふ規則一つで盡きて居るのに、へボン式ではそれが三通りの變化になる。

(五) へ行の音便でも、

Hune (舟) が Kobune

Huta (蓋) が Nakabuta

になるのと

Ha (齒) が Ireba

Hitu (櫃) が Komeditu

Hei (塙) が Itabei

Hori (堀) が Turibori

になるのを較べ、又

Huku (服) が Monpuku

Hun (分) が roppun

になるのを

Ha (派) が Sinpa

Hi (日) が Tenpi

Hen (遍) が hyappen

Hon (本) が Gappou

になるのと較べると、フとヒ、ホとハが全く同様な性質を持つて居て、これ等の變化は、日本式では單にフがッ又はッになると云ふことで盡きて居る。ヘボン式で書くと、フとフとの二つが全く同じやうに變るといふ珍しい結果になる。

(六)他の音便の例を云へば、

kakeba が kakya

yomeba が yomya

になる類がある。日本式では

tateba が tatyā

oseba が osya

だから、皆 kakeba yomeba などと同じ形で行つて、凡て eba が ya に變ると云ふ規則で統べられる。ヘボン式でそれを書くと、タ行サ行に限つて

tateba が tacia

oseba が osia

だから、そのやうな規則が成立たなくなる。

上の通り日本式の方で規則が簡單になるのは決して偶然なことではなくて、それが日本語の性質に合つて居るからであるのは言ふ迄もない。言ひ換へれば、上の實

例は皆日本式綴り方が日本語の性質に合つて居る證據だと言つてよい。

(七) 漢字の音(日本で認められて居る音)を漢字の字引で引くと、例へば「加」は「古牙切」とある。これは、*ko-ka* の前の字は父音 *k* 後の字は母音 *a* を供給して「加」の音 *ka* を與へることを意味して居る。即ち、*k(o-ka)* に於ける中の部分を取去つて其音を知るのである。拗音の方では、例へば「秒」が「亡沼切」とあるのは、*ho-sei-yo* を *h(o-sei)yo* のやうにして、*ho* がその音であることを示すのである。又「驅」が「丘于切」となつて居るのを見ると *ku(ya-)u* だから、説明の字二つのうちの前の方が拗音であるのは無關係であることが知れる。

このやうな規則を知つて「地」を引くと、それは「徒利切」となつて居て、*to-ri* を上のやうにすれば *t(o-ri)* で自然に「地」の音として *ri* の綴りが得られる。又「貯」の「丁呂切」は *t(ei-r)yo* と *tyo* の綴りを與へる。逆に「チャ」の音から「タ」などの出る例は、「琢」の「竹角切」が *t(iku-k)aku* と *taku* を與へるの(若し *chiku-kaku* と書

して *chi* を獨立の父字と見るならば *chaku* になる筈)や、「呈」の「直貞切」が *t(yo-ku-t)ei* と *tei* になる(若し *choku-tei* ならば *chaei* になる筈)などである。「墜」の「直類切」が *t(yoku-r)ui* と *tui* になるなどは、*chi* 音と *tsu* 音とが音じ父字で綴られることを示す點で特に面白い。

これで見ると、日本式綴り方は、日本で——ローマ字の形にこそは現はれなかつたにしても——昔から認めて居たもの否實地に使つて居たものである。

五、國語の正字法に關する一般的考察

日本式綴り方で書く *ti* や *tu* が *ち* や *つ* の音を正しく表さないといふことを氣にする人がある。これは、ローマ字の書き方は音を正しく表すべきものと考へて居る人達であるが、この考は根本的に間違つて居る。

一體、同じ語でも、その音は地方と人と場合とに應じて種々の程度に自然に變

——それが完全に正しく寫されて居ないとしても。併し言ふ人の側から云へば、出る音よりも、どういふことばをどう結び合せて思想を表はすかが問題である。例へば「金」と云ふ語と「屏風」と云ふ語とを組み合せて *Kindyōbu* と云ふときに、キンのンがヨの音に變るといふことは、發音そのものを調べる人には要なことであらうけれども、言ふ人の側では一向注意しないことで、ンがヨの音になるのは當人が意識しないで自然に起る變化である。又、「金貨」と云ふのも同様、此時キンのンがヨの音になることも、言ふ人は少しも注意しないことである。つまり、言ふ人は「金」「金屏風」「金貨」の三つで *kin* と云ふ語は同じつもりで居るので、ロがヨになりヨになるのは自然の結果として表はれるのである。聞く人はそれを *ロヨ* と書き分けるのもよからうが、言ふ人はそれを書き分ける必要を感じない、寧ろ同じに書く方を當然と思ふわけである。日本式では、實際吾々日本人が各の語を云ふときに、云はふと思ふことを主にして書いて居るので、同じロを使つて *kin*,

Kindyōbu, *kinwa* と書いて居る。

上に出したのは組合せ言葉であるが、シチツなどの綴り方に就ても、全く同様である。前節(四)で述べた通り、吾々の實際使ふ上の關係を云へば、タチツテトの五音は全くカキケケの五音と同様であることから考へて見ると、の音が、のの前やのの前で性質が變るといふことは、ロがやのの前で性質をかへると全く同様な、日本語の自然の性質である。従て、言ふ人、音を使ふ人の心持から云へば、タチツテトを *ta chi te to* と書くのが全く當つて居るのである。

そして國語の正字法は其國語を使ふ人即ち云ふ人の書き方に従ふべきことは云ふまでもない。

要するに、音の使ひ途から云へば五十音圖は全く規則正しいもので、そのうちの或る音が音聲的に不規則になつて居るのは、日本人の發音上の癖と見るべきである。どうせ、我々の使ふ道具であるから、このやうな癖には正しい正しくないとい

ふやうな議論はある筈がない、只そのやうな癖があると云ふ事實が絶対の權威を持つて居るのである。そのやうに不規則になつて居るのが善い日本語の音なのである。このやうに自然に起つて居る音の變化は、吾々使ふ人の側から云つて一々それを書き現はす必要はない。音を使ふ人は使ひ途の規則正しい書き方をするのが當り前なことであつて、それが即ち日本式の書き方である。

注意。上の論から見れば大事なことではないけれども、念のために書き添へて置いてもよいと思ふことは、ヘボン式が日本語の音聲を正しく現はして居るものではないといふ點である。shī chī fu が(英語風の shī chī fū では)シチフを正しく現さないばかりではない、ニキヒなどは發音的の ㄋㄣ ㄆㄣ とちがふし、はねる音ン(これは日本語に特有な音で英語などにない)をㄣで表はすのも丸で勝手な取極めであるし、ㄣの音になるㄣをㄣと書き分けながらㄣの音になるのはㄣのままにしたり、鼻音のガギゲゴをㄣで書いたり、音聲を正しく表はすと

點ではヘボン式は全く中途半端なものである。

六、五十音圖と日本式綴り方

人によつては、五十音圖が音聲的に規則正しくない處から、その組み立てが「誤つて居る」とか、「價値のないものだ」とか評するのを聞く。併し、上に述べたやうに、日本語に實際使はれる音の使ひ途の關係から、ローマ字の綴り方と同等だと云つてよい漢音の反切までが、全く五十音圖に對して規則正しくなつて居る事實は否むわけに行かない。

それ故、若しローマ字の綴り方を——五十音圖をけなす人々のやうに——ヘボン式又は其他の五十音に拘泥しない式で書くとするれば、上のやうな文法上のことを説明するには、其式で五十音圖を書いて置いて、問題の起る毎にそれを参考しなければならなくなる。現に英語で書いた日本語の文法書にはそんなのが珍しくない。若

し五十音圖の通りのものを書いて置かないとすれば、例へば「規則正しく行けば」になるべきものは *ei* になり、*ei* になるべきものは *ei* になる「などといふ規則を設けることが必要になる。併しかういふ規則は、五十音圖を掲げると實質に於て同じことであるのは云ふまでもないから、つまり五十音圖をけなす人は却て五十音圖を座右に備へて置いてそれによつて日本語の音の實用上の規則正しさを知るを要することになるのである。

これはつまり、五十音圖が日本語で音の使はれる關係を規則正しく表はして居るといふ事實だけは、どうしても認めなければならぬといふことの證據である。

日本式綴り方を使ふとなれば、このやうに確な意味を持つて居る五十音の實質が綴り方の中に織り込まれて居るから、五十音圖を別に備へて置く必要がなくなる。そしてサ行タ行等をカ行マ行其他と同様に取扱つて行けるのである。これこそローマ字を生かして使ふものであり、又日本語がローマ字式の國語であることの正味を

捕へた行き方である。

七、日本式綴り方と假名遣ひ

日本式綴り方ではザ行の *zi zu zya zyu zyo* とダ行の *di du dya dyu dyo* を區別して書き、又 *ka sa* と *kwa swa* も區別して書く。これ等の音は、人によつては區別なしに言ひ且つ聞く爲に、——特にザ行ダ行に就いてはヘボン式でどちらも同じく *ji zu ja ju jo* とするために——日本式は假名遣ひに拘泥して居ると考へる人もある。

然るに、他方では假名でハヒフヘホと書いても音がワイウエオであるのは *hi, fi, fi, o* と書き、假名ではシャウ、シヨウ、セウ、セフなどと書き分けるのでも音が *sho, sho* ならば皆 *sho* と書く。其他の拗音の場合も皆同様である。これ等の點では日本式は發音的であると云へる。

此等二通りの取り極めが撞着して居るやうに見えるので、日本式は譯がわからないといふ評を受けることがあるが、下に記す吾々の立場を見れば此疑は解けようと思ふ。

日本式の立場は次の二個條にあるので、上の二通りの取り極めは二つとも其の結果である。日本式では

(一)從來各々の假名が單獨に表はして居る諸音は各々の獨立の存在を認める。

それ故にザ行とダ行とに似寄つた音があつても、別々に獨立の存在を認める。之に反して、ヤ行のイエ、ワ行のウは、ア行のイエウと同じ假名になつて居るから、*yi ye wu* の綴りは認めない。英語風の綴り方では、*ye* の綴りが使はれて居る、特に金の「圓」の外國綴りが皆 *yen* になつて居るけれども、ローマ字では圓を *円* と書く。私の考では、*yi ye wu* の音は日本人の趣味に合はないいやな音であるので（私自身の感じは實際其通り）、それを使ふべき所にはア行の音を使ふのが善い日本語だといふことに自然になつて居るのであらう。

この方針は、假名に盲従又は拘泥するといふ意味でなく、現在の書き方で區別を認めて居るものは、ローマ字でも區別するのが當然なことだといふ意味から來て居る。

(二)假名の書き方で書いてある通りに、即ち單獨の假名通りに發音しては實際と違ふ場合には、實際の發音を表はす書き方に従ふ。

それ故にシャウ、ショウなども音が *shiau shiyou* でなくて *shio* である場合には *shio* と書く、ハヒフヘホも音がワイウエオである場合には *whifoo* と書く。ワ行の *wi we wo* も、單獨の音としては存在を認めて居るが、實際に使ふ語では大抵の場合に其通りに發音しないので、綴り方も大抵 *oo* にする。尤も「植ゑる」などは音に於ても *uweru* の方が當つて居るかも知れないが、これも關西では却つて *uynu* としふ音にして居るといふことであるから、矢張 *peru* が一番無難らしう。

關係詞のヲだけは、實際の發音もヨの方が正式なものと認めて——假令日常の多くの場合には。の方が近くても、改まつて注意して云ふときにはヨと發音すると認めて、書き方もヨとする。(近畿から中國邊の人は、改まつて云ふときにも。と發音するらしいけれども、。ではいけないと思ふ人が實際少ないとは云へなからヨをよとする)。

Kwa swa は實際 ka ga と違ふやうに發音する人が相當に多く、且つ其方が正式だと認められて居るから、kwa swa と書く。東京辯では kwa swa を ka ga と同じに——例へば Kwazoku を Kazoku のやうに——ふけれども、これは東京辯の訛りと見てよい。これを東京辯の訛りといふのは餘り酷だと云ふ人もあるやうであるが、併し「火鉢、日比谷」を Sibati, Sibiya とふのは誰でもそれを東京人の訛りとするに異存があるまい。次に「新宿」を Sinziku と云ふのはどうか、これはヒをシと云ふ程に判然と訛りと感じて居ない人が多いらしいけれども、Sinziku で正しいとは誰も云ひ得ないことで、それは矢張り東京辯の訛りであると云はねばならない。クワをカと云ふのはシュをシと云ふのと性質までも似た違ひ方で、「シュをシと云ふのは訛りであるが、クワをカと云ふのは訛りではなから」といふ議論は成立ちさうに思はれない。

併し、「皇、光」などの漢字の發音になると、kwo と發音する人は極めて稀で、發音に注意して讀む場合でも、大抵 ko と云ふから、これは kō と書いて居る。若し尙取調べた結果、kwo も音の方から別の存在を認める必要が起つて來れば、矢張り kwo と書くのが正常になるわけであるが、是迄の處その必要を認めて居ない。又、反對に、將來 kwa swa を ka ga に對して云ひ分ける人が、現在 kwo を kō に對して云ひ分ける人の少いと同じ程度に少くなるならば、kwa swa を ka ga と書くのが當然になるわけである。

ジとヂ、ズとヅ等に就いては、日本式で各々獨立の存在を認めることは上に述べ

たが、音の點から云つても、これ等は別々のものである。九州四國邊の人は實際其區別をして居て、ヂと云ふべき處をジと云ふと意味が通じないといふ事實から見て、それ等が別々の音だといふことに少しの疑を挿むことも出来ない。

私自身は東北の生れで、この區別には不得手であるが、それでもこの區別に注意して居れば、云ふ方にも聞く方にも區別が出来る。つまり、シスと云ふ通りの口付きで聲を喉から出せばジズになり、ヂと云ふ通りの口付きで聲を喉から出せばヂヂになる。これは誰でも自分で練習すれば區別が出来るやうになる。東京其他の地方で區別をして居ないのは、知つて同じにするのではなくて、このやうな教育を怠つた爲に、區別を知らないのだと云ふのが當つて居ると思はれる。

外國語の發音に就てはひづかしいことを知つて居る人の中にも、日本語のジとヂ、ズとヅ、ジュとヂュ等の區別を無視する人のあるのは滑稽なわけである。英語の *buzz* と *buzz* の差や、*injure* の *ju* と *exposure* の *su* の差などは丁度ダ行とザ行の差に

當るやうに思ふ。チェンバレン氏の「口語日本語」の書 (p. 17) に、「水」を *mizu* とするのは音の上で正しくないといふ意味のこの書いてあるのを見ても、ズとヅの區別は却て外國人によく感ぜられる區別だといふことが知れる。

ジとヂ、ズとヅは、音の資格の上から云つても、一方はシスの濁音、一方はチツの濁音だから、各々獨立に存在すべきものとするのは至當なことである。この點は音便の變化を見れば尙具體的にわかる。

<i>Ska</i> — <i>Mezika</i>	<i>tikai</i> — <i>tedikai</i>
<i>Sami</i> — <i>Syuzumi</i>	<i>Tuki</i> — <i>Mikaduki</i>
<i>Syasin</i> — <i>Irozysin</i>	<i>Tyaya</i> — <i>Ikkendyaya</i>
<i>Syusu</i> — <i>Kezyusu</i>	<i>Tyôsi</i> — <i>Hondyôsi</i>

これ等は皆サ行がザ行に、タ行がダ行に變るといふ一般の規則に従つて居るので、それが

Sake—Sirozuke

Yama—Akadama

と同様な音便變化であることが、*シ*と*ロ*との書き分けによつて適切に表はされるのである。

zya zyu zyo と *dya dyu dyo* に較べて、*ja ju jo*の方が短くてよいと云ふ人が少なくないけれども、日本人一般の氣持から云つて、これ等はシャシュショチュチュと同種類の音である所から、却て各三字で書く方が當つて居る（これは看版や廣告などに *ja ju jo* と *シ*ふ綴りが決して珍しくないことで知れる）ことは前に（三）で云つた通り。

一體、上のやうな區別を廢するかどうかは、國語其もの問題で、ローマ字の問題ではない。國語の方で一般の意見が改めたいときまつて居る問題ならば、字を改めるのを機として實行するといふのも結構であるけれども、一般の意嚮のきまつて居ない問題に對しては、ローマ字の方から勝手な取極めをすることは穩でない。ロ

ーマ字使用の目的から云へば、ジヂの區別の存廢の問題は、國語の問題として其まゝ残して置いて差支のないことでもあるし、又其方が穩當でもある。（若し區別をしない書き方にきめるとすれば、區別をして書きたいといふ正常な要求に應ずることが出来ないといふ不満足な状態になる）。將來國語の側で、ヂをジと書くのがよいと一般に認められるならば、その時になつて *ジ*を廢して *シ*と書くことにしても晚くはない。それまでは、最後に示す「許容案」位はよいとしても、正式な書き方のローマ字では矢張區別を存して置くのがよい。

將來國語側でヂヂを廢するといふやうな評議が認められることがあらうかと云ふに、私はさうは思はない。一體ヂヂを廢するといふ考は、「正字法は音を寫すべきもの」といふ舊式の考に基づいて居る。今では音聲學者も（上の五で述べた通り）正字法はもつと廣く國語の性質に従つて定められる筈のものといふことを認めるやうになつて來て居るので、例へば「三日月」を「みかずき」と書くなどと云ふ

やうな、國語意識を蹂躪するやうな評議は、將來も行はれる筈はないと思ふ。

上のやうな區別を音の上で爲し得ない人が、實地書くのにこまるといふ論は、一應尤なことであるが、そのの参考になるのは、書き方の規則正しいと考へられて居るドイツ語の *Ja, Ne* である。これ等は同じ音であるに拘らず、ドイツ語で書き分けることになつて居るが、我々ドイツ語を學んだものはその爲に大きな不都合を感じては居ない。ドイツ人の中で全く教育を受けない自分の言ふ音のみを知つて居る人には困難があるかも知れないけれども、日常の新聞雜誌等を見て居るものには、まぎれることがない。日本語でヂジ等の區別の丸で出来ない人でも、ローマ字で書いた文章に多少慣れば、見た形の方から自然に區別が出来て何の苦勞もなくなることは、このドイツ文の例で十分分る。只ローマ字文に慣れないうちは、自分で書かうとする時に、時々問題が起つて字引を引く世話がある。併し、これも、二三度書いた後には、ひとつの語は *ニ* なり *ニ* なりて目に映るから、おきに見覚えられるので、實際上は左程手数のかゝることはない。

許容法を認めること。併し初だけでも、字引其他の参考書が手許にない場合又はあつてもそれを調べて書くほどのことはないと思ふ人、又は自分だけの主張としてカとク、ガとグ、ザ行とダ行の區別なしに書かうと云ふ人は、ク、グ、ダ行を止めて、凡てカ、ガ、ザ行に即ち

kwa gwa di du dya dyo をそれぞれ ka ga zi zu zya zyo と書いてよい

とするのが適當だと考へる。即ち特別に正式な書き方をすることの必要な場合には相當な手数をいして調べることにして、その他の場合には恠しいのは皆 *ka ga z* にするがよい。これが吾々が實地の上に最適切だと考へて居る許容法の取極めである。

八、英語や外國人に對する點

英語に對する點。兒童に^ロをチと讀むやうに教へると、英語を學ぶときに英語の^ロを同様に讀んでこまるだらうと云ふ人が少くない。これは、我々が考へて居るローマ字の重大な使命を知らないで、枝葉の事柄を心配するのであつて、たとひ其やうな點でこまつても、かまはないとすべきであるけれども、實際上そのやうな障りがあるかないかを考へることも、全く無用ではあるまい。

ローマ字で書いた綴りをローマ字流に讀んでは英語と違ふといふことは、^ロや^リに限つたことではない。英語の *a I made to do are* などはいづれもローマ字流に讀んではこまる語である。この點に於て^ロや^リの場合と何の差もない。綴りが同じでも日本語だから^ア、^イ、^{マデ}、^ト、^ド、^{アレ}と讀む、英語だから^{エー}、^{アイ}、^{メード}、^{トゥー}、^{ドゥー}、^{アール}と讀むのである。それと全く同じことで、日本語だから^チと讀む、英語だから^{ティ}と讀むのである。この日本語だから、英語だからといふ區別は、どんな綴り方を使つても、始終注意して居なくてはならないことである。

から、^ロや^リについて特に讀み違へてこまるといふ論は全く要らない心配である。現に、日本式を學んだ兒童に就て其點に注意して見た人の話を聞いても、そんな困難はないのである。「若し^ロに就て困難があるとすれば、それはローマ字でチをさう書く爲に起るのではなくて、英語の^ロ音其物が日本人にむづかしい爲であるに相違ない」。

一體英語の發音は日本語の音と違ふのだから、ローマ字を英語の豫備として教へるなどは適當であり得ないことである。若しローマ字と英語の間に關係があるとすれば、それは只、日本語を書く間に字の形を覺えるのと、^ロや^リなどのやうな父字は母字と合して始めて日本語にあるやうな音を表はすといふ性質を悟るのとの二つの利益がある點である。これだけの利益は、日本式でローマ字綴り方を習つたので十分に得られる。もつと立入つた發音などの問題になると、日本語のローマ字綴りと英語の綴りとは全く關係のないものになつて居る方がよいのである。此點ではへ

ボン式のやうに英語の規則によつて綴り方を取捨したものは、それで英語流に正しい發音に當つて居るかのやうな感じを起させる爲に却て誤を起すことが多い。

要するに、日本語のローマ字綴り方は、我々のローマ字を使ふ立場から云へば勿論、英語を學ぶものの爲から云つても、英語と全く關係のないものにして、日本語は日本語、英語は英語、別々だといふことを初から納得させて置くことがよいので、日本式綴り方は丁度此方針に合つて居る。日本語のローマ字綴り方を英語の發音規則の爲に取捨するのは日本語、英語兩方の損である。

外國人に對する點。日本式では外國人がちがへて讀むだらうと心配する人があるが、一體日本語の讀み方の規則を學ばない外國人ならば、日本語と違ふやうに讀むのが當然で、現にへボン式で書いてさへカマクラをキマキユラと讀む。發音の規則を學ぶとすれば、日本式でも極めて簡單で、外國人に取つて何の困難もない。却て日本式の方が文法上の規則が簡單になる爲に、日本語を學ばうといふ外國人に大きな利益を與へる。

萬國的な點。日本語の發音規則を學ばない外國人の場合を云へば、獨逸人佛蘭西人伊太利人がへボン式のチ *chi* を見てヒヤシヤキと讀むときの相違と、日本式の *chi* を見て外國の *chi* の通りに讀むときの相違とを較べると、前の方は丸で違ふので意味が通じないが、後の方は誤解の虞なく意味が通ずる。チの *chi* と *chi* も同様で、外國船に品物を賣込む「明治屋」が「メイイヤ」と云はれる處から *Meijiya* を改めて *Mei-diya* としたのはこれの最も適切な實證である。日本式の *tya, tyu, tyo, dya, dyu, dyo* なども、どの國語でも日本語に近く發音する。へボン式の *cha, chu, cho, ju, ju, jo* が丸でちがふやうに發音されるのに較べると、日本式の方が萬國的な性質を多く備へて居る。(この點については尙一九七頁で述べる)。

世界に於ける日本語の書き方。外國人方面で行はれて居る日本語のローマ字綴り方がへボン式にきまつて居ると考へて居る人があるが、決してさうでない。ドイツ

語の地圖 (Andree の) に Tschoschi (銚子)・Itschinomiya (一の宮)・Hodscho (北條)・フランス語の百科辭典 (Larousse や Colin) に Fouziyama (富士山)・Tokousima (徳島) などとある。

尤も、大體の形勢を見ると、ドイツやフランスでもヘボン式が多く使はれて居るが、それはやがて英米人のきめた日本語の書き方が正式な日本語のローマ字書き方と見られる虞があることを示すものであるから、吾々は今のうちに——即ち外國でまだ全く一つにならないうちに——吾々の手で吾々に適切な書き方を定めなくてはならないのである。

上に述べた通り、日本式綴り方は丁度さういふ適切な綴り方であつて、而もそれが萬國の性質を具へて居るといふのであるから、吾々は躊躇することなく、この日本式綴り方を採つて進むべきである。

九、外國の ts 音 ts 音などの書き方

ts をチツと讀ませるならば、外國の ts 音をどう書くかといふことを危ぶむ人がある。併し、外國の ts 音は日本語の音ではない。此點では英語の ts の a, not の o 、獨逸語の ot 、佛蘭西語の鼻母音など、皆同様である。外國の ts 音を書くことを心配するならば、これ等の種々の音の書き方も皆心配しなければならぬわけである。さうなると、問題が日本語の書き方でなくて、人類の凡ての音の書き方になるわけで、吾々の目的と丸で離れてしまふ。これ等の多數の外國音を書く方法を設けて置く必要がないとすれば、外國の ts の音も別に書き方を設ける必要はない。(外國でも、例へばドイツ語やフランス語などでは英語の ts 音をどう書くことも出來ず、英語や佛蘭西語などでは獨逸語の ot 音をどう書くことも出來ない。日本語の中で外國の色々な音をどう書くことも出來ないことも、これ等と同

様止むを得ないとして當然なことである。尤も、特にこれ等の音のことを日本語の文章の中で論ずることはあるだらう。其時には、茲に私が書いて居る通り *Gwaiiko* *ku no ti tu no On* と書けばよい。「ドイツの *ch*」「フランスの *en*」其他も同様によればよい。

人によつては、外國の *tsu* などの音は、今は日本になくても、其内に行はれるだらう、其時はどうするかと云ふ。これも考へ方が浅い。假にそれが行はれるとして、何にさう云ふ音が行はれるかと云ふと、外國語を日本語の中に使ふ場合に行はれるに相違ない。外國語を入れる場合のことを云へば、上に云つたやうな種々の外國音も皆同様に使はれることがあり得る譯であるから、獨り *tsu* のみを心配すべき理由がないし、且つ又何れの外國音に就いても心配する必要がないのである。何故なれば、外國語は、假令日本語に混ぜて使つてあつても、綴り方も読み方も元のまゝに置くのが當然なことであるから。例へば英語の *tin* と云ふ語を使へば、それは英語だから（英語とわかるやうな處でなければ使つてはいけないことは云ふ迄もなし）、*tin* と書いて英語風に讀むべきである。

此外に、*tsu* のはいつた外國語が、他の點では日本化して、只 *tsu* の發音のみが外國流になつて居るといふ場合も考へられないことはないが、私の考へでは、日本人の發音の癖から見て、かういふことは起らない——*tincture* をチンキ、*Typhus* をチブス、*Platina* をプラチナ、*Nicotine* をニコチン、*Distoma* をヂストマ、*Doek* をヅック、*Radium* をラヂウム、*Diastase* をヂアスターゼ、*Tuberculin* をツベルクリンとする實例もあるから。例令又或る特殊な語だけは *tsu* を外國語風に讀むとしても、それが外國の語である點から、それは特別にそのやうに讀むのだとして少しも差支なく、且つそれが最も穩當な處置である。少くも、このやうな、起りさうにもない事の取越苦勞から、現在十分な理窟のあることを矯める必要はない。

一〇、ウ列の音にロを省く説について

人によつては、ウ列の音、クスツムルグズブ等を書くのにロを省いて、*ks*……と書く、例へば *arimas*, *wakasi* などのやうに。これには二種の論者がある。第一は是等の場合にはロの音が實際なし——*ari-ma-su*, *wa-ta-ku-si* といふのとは違ふ——からロを省くと云ふ論者。第二は、實際の發音はどうでも、只日本のクスツ………を *ks*……と書くと取り極めるから、それでよいと云ふ論者。

第一の論者の云ふ事に私が賛成しない理由が二つある。一つは、實際それ等の場合にロの音が丸でないのではなくて、只軽く小さく(喉で聲を出さずに口先だけ)で發音して居るのであると云ふ點である。例へば横濱で外國人が出した日本語の本などにも、*arimasu* このやうな印をつけて、ロを省いてはないのなどもその爲かと思ふ。又このやうに口先だけで音を出すことは、ウ列の音に限つたことでなくて、

Kiku (菊) *Kina* (北)の *Ki*, *Sina* (下)の *Si*, *Kimpika* (金ピカ)の *Ki* なども同様な所謂無聲音である。これを考へても、決してクスツ……などにだけロを省くといふ理窟がないことがわかる。

もつと大切な第二の點は、吾々の目的とすべきは正式な日本語の書き方であると云ふ點である。小説か何かで、人の云ふ詞を癖や訛りまでそのまま寫す場合などは別として、普通の吾々の書き物は思想を表はすことが主であつて、人がそれをどんなに讀むか、開き直つて讀むか、各自の癖のままに讀むかを問はないのが一般の場合である。それ故に、このやうな書き物は、正式な讀み方、正式な日本語に適するやうに書くべきである。

正式な日本語としては、ウ列の音にもロ音の存するのが至當であることは、吾々が開き直つて物を云ふとき、ゆつくり文句を云ふとき、歌にさう云ふ文句を入れる場合、唱歌や従來の種々の謠ひ物でそれを取扱ふ仕方等を考へれば、少しも疑ふ

餘地がない。(地方によつては、普通の言ひ方でもロ音を明に出す處もある)。従つて正式な書き方は、それに従ふのが當然である。このやうに *arimasu, watakushi* と書いてあるのを讀む場合に、*arimas, watakusi* に似たやうに讀まうと讀むまいと、それは讀む人の勝手にしてよい。

第二の論者の云ふやり方では、例へば、*ロ*の音の確にある *kannu* を *kann* とし、*kannu* を *km* 又は *kann* とする類で、これはローマ字の性質を根本から變へるのであるから、失ふ所が多くて得る所が少いだらうと思ふ。

いろいろの人が工夫して發表したローマ字綴り方の中に、餘つて居るローマ字を利用して、書いた字數を少くするといふ意味で、*l*をリ、*q*をキなどと讀ませる案(左近義弼氏の案)もあるが、これもローマ字の性質を根本から變へると云ふ點から費成出來ない。

一一、結論——日本式の過去と將來

上に(三以下に)述べたことから見ると、日本式の綴り方が、日本語の性質を主にいて居ながら、ローマ字の根本の性質を無視するやうなことなく、理窟に協つて居て同時に實用に適して居る綴り方、要するに中庸を得て居る綴り方であることが特に明に知れると思ふ。

一體、ローマ字運動の目的は、日本國民全體がローマ字を使ふことにあるのは言ふまでもない。このやうに國民全體に受入れられると云ふには、其事が國民の感じにきつちり當嵌まるやうなものでなくてはいけない。昔から、外國から日本にはいつて來た思想其他のもので、國民の大部分に受入れられて居るものは、皆日本固有の思想に同化したものに限るので、今後も、この點は變るまいと思はれる。

かういふ點から見ても、ローマ字が將來日本國民全體に使はれるとすれば、それ

はローマ字が一般の國民の自然の感じに一致したものになつた上のことであるに相違ない。現に前からローマ字を使つて居たといふ人でも、「ヘボン式を書いて居る間、どこか落ち付かない感じがして居たが、日本式を知つてから、丁度搜して居たものを見付けた様な心持で、安心してローマ字を書いて居る」と云ふ人が少くない。この心持が非常に大切なもので、ローマ字の將來を考へる人はこの點に目を着けることが必要である。

日本式が日本人一般の感じに合ふことの實例は、名簿、索引、字引の類の排列にもある。これは第二篇第二章の四で述べる。

日本式が日本人の自然に書く書き方であることは、明治維新よりもずつと前に、蘭語の行はれて居た時に、日本語をローマ字綴りにしたのが既に其行き方であつたのでもわかる。寛政七年に出た大槻磐水の蘭學佩觿にも、五十音圖を全く規則正しい綴り方で書いてあつて——ウ列の音を、ロの代りにオランダ流に。で表はした

ことと、ハ行に h と h と二行、ヤ行に ya と ya と二行を書いてあることなどが違ふけれども、——全く日本式の行き方と同じ行き方である。島津齊彬公の書かれたローマ字文もこれと同じ綴り方である。

明治五年に國學者黒川眞頼氏が木版本で出した「横文字百人一首」は、今吾々が使つて居る日本式綴り方と同じ綴り方になつて居る、只ワと讀むハを「 w 」と書くと云ふやうに、音の變つて居るのも假名通りに書いてある點が違ふだけ。

今英語方面や外國人方面で行はれて居るヘボン式は、外國人の書き始めたものであるからあのやうになつて居るのであるが、日本人が外國人に關係なく書いたものは、上の通り、もつと古くから日本式と同様なものであつたのである。これは、理窟は別に考へたわけではないらしく見えるが、理窟を考へなかつただけ、却てそれが日本人の自然の氣持に一致して居ることの證據だと云へるのである。

其後、英語の流行とヘボン氏の辭書から引續いた勢力の爲に、ローマ字と云へば

へボン式だけのやうになつて——明治二十年前後に田中館博士の仲間が日本式を使つたことも一般の人には知られないで——ローマ字論再興の時代(明治四十年前後)に至つた。

然るに、この時代になつて、我々の同志が日本式綴り方を使ひ出してから僅か二十年位にしかならない今日、中等學校の英語科では引續いてへボン式が主として行はれて居るに拘らず、現に日本式のローマ字仲間が、遙にへボン式のローマ字仲間を凌ぐ景氣になつて居ることも、上に云つたやうに、これが日本人の自然の氣持に合つて居る爲であると思はれる。

日本人の氣持から見て工合のよいものであるなら、それを世界に持出したときに、外國人の受けが悪くはないかとは、誰でも自然に抱く疑であらう。この點については、第二篇第一章の四に書いてあることを見ていただきたい。そこには、外國の有力な聲音學者其他の學者が純學術上から日本式ローマ字を賞賛して居ることが出て

居る。これで日本式が、世界的に認められて居ること、及び日本人自身の氣持と局外者の理論的判断とに共に合つて居るものであることが知れる。

今日では、日本式は只少數者の議論の上の書き方ではない。現に、それによつて書かれた數多の出版物も世に廣く行はれて居るし、中央氣象臺、陸地測量部、海軍各部局、陸軍各部局、各種の學校等で公にこの綴り方を採用して居られるのである。(第二篇第一章の六參照)

このやうに、日本式の過去と現在とを見、それが持つて居る據り處を考へると、日本式の綴り方が將來益々その價值を現はして來て、それによつてローマ字が日本國民全體に受入れられるやうになることは、疑ふ餘地がない。

第七章 ローマ字に關係した其他の問題

一、字の名前と順序

ローマ字はイギリス、フランス、其他の國で使つて居る字ではあるが、その名前は國々で違つて居るので、日本の名前は日本の名前として別にきめる必要がある。この名前には、綴り方に於けるやうに、どうでなければならぬといふ理窟のないのが多いので、茲に出すのは一つの案に過ぎない。

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
ア	ブ	セ	デ	エ	フ	グ	ハ	イ	ジュ	カ	ル	ム
n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
ナ	オ	プ	ク	ラ	ス	ト	ウ	ヴ	ワ	ク	ユ	ズ

此案は次の方針によつて定めたものである。

- (一) 使ひ途に對して不適當でないやうにすること。
 - (二) 父字の名はフランスの新しい名のやうに不明瞭な名を取らず、種々の母音を添へて聞き取り易いことを期すること。
 - (三) 一音にすること。
 - (四) 日本人の言ひ易い音にすること、(但し f i v の三つは外國音を表はすのに使ふから、その名前のフルキも只大凡の名とし、精密に云へば、外國音の fu lu vi が正しいとする)。
 - (五) 五十音圖のうちの清音にあたる父字にはア列の音を取り、濁音半濁音の父字にはエ列の音を取ること。
 - (六) 其他の字の名前は上のきまりに邪魔にならないやうに、又普通使はれる他の字の外國名にまぎれないやうに適宜にきめること。
- 上の(一)で母音 a i n e o の名前がきまり、(一)と(五)とで、日本音に使ふ父音十四字の

名前がきまつて、残り c f j l q v x の七ツだけが問題になる。

c は「ABC 順」などと云ふ場合の語呂の工合からせとする。

f には fa fi fu fe fo のうちで似寄つた音の云ひ易い fu を取る。

j は、ヂエは Z のゼと紛れ易く、ジは g の英名と同じで都合わるく、エスベラント流(又は獨逸名のヨットの初め)のヨをよいとする。

l は r のラを除いたどれでもよいわけだが、エルのルを取る。

q は簡単な方に従つて獨逸の ku を取る。

v は英語の v 音(獨の w 音)を表はすのに使ふ字であるので、多く人の使つて居る英の vi を取る。

x は算術や代數で「エックス」と云つて居るが、これは英語名の訛つたもので、若しこれを其まゝ *ekhsu* が正しい名前だと云ふことにすると、外國名に似もせず、簡單でもない鵠的なものになるから、寧ろ上の(三)に従つて、ギリシヤ名の ξ を漢

字の反切流につめて ξ とした。x は時々キリストの標しにも使はれるから、其頭字のキだと見てもよい。

●●●●●
ローマ字の歌。ローマ字二十六字の順は世界に共通なもので、字引、索引、名簿其他凡てそれに従ふのが便利であるから、一般に教へる必要がある。上の名前を使つてローマ字の順を記憶するのに都合のよい歌が出来て居る。

ローマ字は

アベセデ エフゲ ハイヨカル

マオベクラサ タウキワキヤゼ

勿論意味のないものだが、口調だけは三十一字の歌になつて居るから、記憶の助けにはなる。

日本語ではローマ字の順を必ずしも外國と同じにしなくてもよいから、今迄の五

十音順に近い a i u e o k g s z t d n h b p m y r w (他のものはどうでも) したいといふ説もある。しかしローマ字の一つの重なる強味は世界共通の字だといふ事であること、その順が各國共通であることから考へて、これは世界的の順序に従つた方が得策である。外國人が字引をひいて日本語を読む場合、日本兒童が外國語の字引をひくのにまごつかないこと、外國人もはいつてゐる人名簿の取扱ひ方、その他いろ／＼な問題について日本流世界流の二重の規定を使ふのは混雜のもとで不得策である。

舊い案。上の案は私が「ローマ字文の研究」を書いた時に「別の案」として出したものである。その時の第一案は、上の方針の(五)をきめずに擇んだので、上に出したもののうち、l m n r s t をそれぞれラムヌレステとしたものであつた。

今度この舊い案をやめて上のもの(舊の第二案を)主な案とすることにした理由は、小學兒童などにローマ字を教へる場合に、綴り方は容易に覺えるが、二十六字の順

を覺えるのに苦しむので、それを易くするためである。もとの案でもローマ字の歌は容易に覺える。しかし、綴り方で知つた字 k s t n h m y r w g z d b p の名前が何だらうと云ふときに、それぞれの行のどれかの音(例へば s はサシスセソのうちどのどれか)にはなつて居ることを知つて居ても、何列の音と知らないから、例へばアベセのセが s であらうと思つたり、k はベクのクだらうと思つたり、いろ／＼とりちがへるのは無理ならぬことである。今度の案では、清音の父字はア列、即ちカサタナハマヤラワ、其他はエ列、即ちゲゼデベベときまつて居るから、歌を覺えて居れば、日本語に使ふ字のある場所はまぎれなく知れる。(日本語に使はない字は、初學者には左程大切でもないし、又習ふ場合には字の形と名前とを結び付けて習ふから、歌を覺えて居れば差支ない)。上に述べた五十音順にしたいといふ希望も、一つは、もとの案では、順(又は名前)が紛らはしくて間違へやすいことから來て居たのかと思ふが、今度の案であれば、其邊の困難は全くなくなると云へる。

(一) 引く音は、一〇九頁の表に示したやうに、母字にへをつけるか、母字を二つ重ねて書くかのうちどちらかにする。例へば「東京」を Tokyo と書くのは日本語の書き方としては誤つて居る(それではトキであるから)。英語では引く音に別に標しを付けないけれども、日本語では昔から引く音と引かない音とは明に書き分ける習慣になつて居るから、「東京」は必ず Tokyo 又は Tookyoo と書かなくてはいけない。字引や名簿索引などでも、o は oo と同等に取扱ふことにして居る。これは例へばおほさい ちひさいなどのやうに、o か oo か、ii か i かわからないやうな例もあることと、活字やタイプライターなどの都合でoの類にきめると都合がわるいことが多いからである。但し「お送り下さる」を okuri kudasai とは書かない。これは okuri へ臨時的に o がついたのであることは明だから、o-okuri 又は ookuri と書く。收入の類は Syanya のやうに書くが、平生の類は heisei のやうには書かないで、heizei のやうに書く(これはそれが正式な云ひ方だと見るから)。

其外特別な場合のことは「ローマ字文の研究」を見られたい。

(二) はねる音にはいつでも n を使ふことは一〇九頁の表に書いたが、特別な取扱を要するのは、その次に母字又は ya yu yo が来る場合である。この場合には、n の次に「切るしるし」を入れる。例へば範圍を Hani 金曜日を Kin'yōbi のやうに。併し紛れる虞のないときには、を省いてもよいとして居る。

(三) つまる音の一般の取扱めは表の下に書いた。特別な場合として「コラッ」と云ふやうなのは Kora'i と書き、「見たつてだめだ」見たつけは mita 'te dame da, mita 'ke, と書く。

尤も、は音便か何かで字の省かれたのを示すのにも使ふから、「見て居て下さる」を「見てて下さる」と云ふのは Mite 'te kudasai と書く。この方は前が te か de にきまつて居るから紛れることはない。「見て行つて」を「見てつて」と云ふのは、同じわけで mite 'te と書く。

(四) $\circ\circ\circ$ と $\circ\circ\circ$ 。正式な音ではないけれども時々使はれるこれ等の音は、本來サ又はッがある場合と、「こいつあー」と云ふやうに本來ッ音のある場合との二通りある。次の例で見られたい。

あとつあん	Otoitsan	} 本來サ又はッのある場合
あはつあん	O-Hitsan	
ごつあー	Gotsō	
こいつあー	Koitsu	} 本來ッのある場合

これ等の音に對して、もつと徹底した書き方として佐伯功介氏の主張する案は、*lwa lwo* を使ふといふのである。これはウ音の拗音化したものの書き方といふ意味で、音の點からは尤も合理的な書き方だと思はれる。併し私は、それが日本語の正式な音でない點から考へて、只今のところ、上のやうな姑息と見える案でよからうと思つて居る。

(五) これも正式な音ではないが、*シエ、チェ、ジェ*などを書きたいときには、*syē, tye, zye*と書き、*フッ、フエ、フッ*などは *hwa, hwi, hwe, hwo*と書く。

三、人名、地名、等の書き方並にABC順配列

國字としてでなくとも多く使はれる人名、地名其他の固有名詞の書き方、並に名簿、圖書目録、索引などに使ふABC順の配列については、別に第二篇第二章(應用されたローマ字)で述べる。

四、外國語の書き方

本來は外國語であつても、 $\circ\circ\circ$ に $\circ\circ\circ$ になつて居ると見るべき語(Aの種類)は日本流に綴る。

例 Raupu, Inki, Miruku.

特別な狭い範圍内で、(例へば學生仲間などで)、外國語と感じて使つて居る外國語(Bの種類)は、もとの通りの綴り方で書き、外國語として目立たせたい時は字體を斜な字體(イタリック)にするのが普通である。

例 Ongaku ni interest wo motte iru Hito.

日本語化することの途中にあると思はれる外國語(Cの種類)は、人と場合によつてAのやうに、又はBのやうに書かれることも自然の勢で止むを得ない。

度量衡などに關係した外國語は、Aの種類と見て、*métoru*, *sentimétoru*, *rittoru*, *miriguramu* などと書く。但し符號を使ふ時は、世界共通に行はれて居るものをそのまゝ使ふ、*métoru* を *m.*, *sentimétoru* を *cm.*, *rittoru* を *l.*, *guramu* を *g.* 又は *gm.* など。

外國から新にはいつて來た品物の名前などには、漢語又は純粹な日本語で適切な語が選ばれてもよい。*Hikôki* や *Zidôsyu* などはそれのよい例である。併し又、外國の名前そのまゝ又はそれに近い云ひ方が行はれてもよい。この場合のうちで、學術上の専門的の語などはBの類として取扱つてよいが、一般の人に使はれる語であると、さういふ日本語が新に出來たものと見て、書き方を日本流にするのが適當と思はれる。例

タイプライター *Taipuraitâ,*

レシーバー *Resihâ* など。

外國の人の名はもとの通りに綴る。

外國の地名。五大洲及び要用な國の名は日本流に書き、其の他の地名は元の通りに書く(理由はローマ字文の研究、§ 91—95で見られたい)。例

Yôroppa, *Igrisu*, *Huransu*, *Doitu*.

London, *Paris*, *New York*, *Berlin*.

五、ことばの種類

ローマ字文で語の使ひ方から即ち文法上からことばの種類分けをすると、自然外國語にあると同じやうな種類分けになる。尤も同じやうな種類分けになると云ふだけで、全く同じ種類に分けねばならないといふことはない。國語の性質がちがふから、他國の語にあつて日本語にないものや、外國の語にないもので日本語にあるべき種類もあるわけで、私は次の十種類(品詞)を見て置くことにして居る。

1. 名詞。 例、Yama, Hito, Kotogara, Nōryoku.
2. 代名詞。 例、watasi, anata, sore, dohira.
3. 關係詞。 例、Hito ga, Hon wo, anata no, Tōkyō kara, sore to issyoni
の ga, wo, no, kara, to などのやうに、名詞性の詞の次に來て、それの他に對する關係を示すもの。

4. 動詞。 例、osn, osita, oseba, は勿論、benkyōsuru, benkyōsureba, などとも各一つの動詞。benkyōsi tamae! の tamae のやうなものは助動詞。
5. 形容詞。 例、utkusui, kireina.
6. 副詞。 例、diki, yohodo.
7. 廣さ詞。 いろいろな種類の語(接續詞と呼かけ詞を除く)にそへて、その語のどれだけの範圍を意味するかを示す語。例、Kodomo dake ni; anata ni dake; nete bakari iru; nittu nari yottu nari; yoku sae nareba などの dake, bakari, nari, sae 等。
8. 數詞。 例、itotu, itimai.
9. 接續詞。 例、sikasi, sosite, keredomo; ……sita ga の ga.
10. 呼びかけ詞。例、Aa! Oyaoya! ……ne! 問ひの文章の終りに來る……ka? も呼びかけ詞とする。

但し日本語では、動詞と形容詞は、いろいろ語尾をかへてちがふ役目に使はれることがある。例へば、*utukusii* といふ形容詞も *utukusiku* といふ形にすると副詞の役目をする。これ等は、役目といふ點から云へば、無論形容詞、副詞と區別する必要があるけれども、單語として見るときには、一つの語の異なる形と見る方がよい。それで、その代表者となるべき形を取つて、その所屬を定める。例へば *utukusiku* といふ語は、*utukusii* といふ形を主な形とするから、語の種類は形容詞だとする（その使ひ途までを合せて云ふには「副詞形の形容詞」又は「形容詞の副詞形」と云ふ）。字引などで詞の種類分けをするには、この流儀で主な形について分類すればよす。

同様に、*kireini* は形容詞 *kireina* の副詞形、"*Tōkyō karano Tayori*" の *karano* は關係詞 *kara* の形容詞形、"*itimaino Kami*" の *itimaino* は數詞 *itimai* の形容詞形である。

六、切り續けの一般的の規則

ローマ字文は、字を拾つて讀む文章でなくて、一語一語を一度に見取つて讀んで行くべき文章である（第三章の四）から、一語一語がきまつた形で目にはいることが必要である。これが、語の切り方がローマ字文で極めて大事な問題である理由である。茲にはその詳しいことは述べられないけれども、一般的の取極めだけを述べて置く。

文章の中で一つの物事を表はして居る詞や、一つの役目をして居る詞を、一つの語と見て一つに纏めて書く。具體的に云へば、上に出した詞の種類、名詞、代名詞、關係詞、動詞、形容詞、副詞、數詞、廣さ詞、接續詞、呼びかけ詞は皆各一纏めにして獨立して書く。

例 *sanjin* (數詞の名詞形) *no* (關係詞) *Oya* || 子三人の親。

sannimo (數詞の形容詞形) *Oya* || 三人居る親。

Atarusii no (代名詞) *ni* (關係詞) *kaki nasai!*

Ki wo tuketa noni (接續詞) *kowarete simatta.*

特に注意すべきことは

- (a) 關係詞を前から離して獨立に書くこと。
- (b) 動詞の後に來る *tamanu, nōsu, kaneru* などの助動詞は獨立させて書くが *masu* だけは前へつけて書く。
- (c) 何本、何枚、何尺、何匁の助數詞は前へつけて、*ippou, nimai, sanzaku, simōme* など、書くが、金の「圓」だけは離して大文字で *sanzūgo En gozissen* (數字を使へば *35 En 50 sen*) などと書く。
- (d) *no* に、前につけるの(形容詞語尾)と、離して書くの(關係詞及び代名詞)とあること。

(e) *ni* に、前へつけるの(副詞語尾)と、離して書くの(關係詞)とあること。

(f) *to* に、前につけるの(副詞語尾、動詞語尾)と、離して書くの(關係詞及び廣さ詞)とあること。

この外で、つけるのと離すのとあるので注意を要するのは *ha, wa, mo* などである。いづれも拙著「ローマ字文の研究」又は「文法字引」で見られたい。

七、名詞に大文字を使ふこと

名詞は初めの字を大文字で書く。これは獨逸語にあると同じ規則であるが、日本語では獨逸語以上に此規則の必要を見る。と云ふわけは、日本語には、關係詞其他の短い語と同じ綴りの短い名詞(又は綴りは同じでなくても、同じ程度に短い名詞)がかなり澤山ある。*To* (戸)・*Wa* (輪)・*Ka* (蚊)・*Mo* (藻)・*Ni* (荷)・*No* (野)・*Karu* (殻)・*Niwa* (庭)など。口で云ふ時には、名詞には自然聲を強くし、關係詞

其他の軽い詞には自然聲を弱くするから、これらの區別が明かで紛れることがない。併し、字で書く時に名詞を關係詞などと同じに書くと、區別が見えなくなつて、意味がとれにくい。名詞を大文字で書くと、見分けが容易になつて、意味を読み取るに工合がよい。つまり、口でいふ時に強く云ふと同じことを、字では大文字で形に表して居るやうなわけになる。

このやうに名詞を大文字で書くことの便利なことは、次の例で十分に分ると思ふ。

名詞に大文字を使はない書き方 名詞に大文字を使ふ書き方

haru no no no asobi.

Haru no No no Asobi.

taihenni ni ni naru.

taihenni Ni ni naru.

te to te to tunagu.

Te to Te to tunagu.

ki kara ki ni tobu.

Ki kara Ki ni tobu.

元來は名詞であつても、特別な使ひ途のもの、又は他の品詞の役目をして居るも

のには大文字を使はない。

「附添ひきぞへひ名詞」。次のやうに名詞又は句に添へて軽い意味に使はれる名詞は「附添ひ名詞」と名けて小文字で書く。

(a) 「何々の上」「何々の下」といふやうに、名詞性の語の後にnoを挟んで(又は名詞がなくても、あると同じ意味に)使はれる ne, sita, migi, hidari, uti, hoka, naka, soto, nae, usiro, noti, aida 等。“Tukue no ue wo katadukeru”のやうに。

これ等の語には終にnoとniを添へた形容詞形及び副詞形を認める。“Tukue no neno Hon,” “kotosi no utini dekiru”のやうに。

(b) Osaka hen, Kyōto atari, Hanninkwan izyō, Sekidō no atari, kono hen 等の hen, atari, izyō の類。

(c) kuru hazu desu; Tosi no sei desu; kōin wake de, kōin tumori desita 等の hazu, sei, wake, tumori の類。